

ポー・カレン語における内容語に由来する機能語のリスト*

加藤 昌彦

(慶應義塾大学)

List of function words derived from content words in Pwo Karen

KATO, Atsuhiko

Keio University

All languages contain function words that emerge through the grammaticalization of content words. Eastern Pwo Karen also contains many such function words. This study has two objectives. The first is to create a list of function words derived from content words and the second is to clarify how function words differ from their original content words in terms of syntax. This study found that 36 out of a total of 166 function words were derived from content words. We then examined what features each of these function words have acquired compared to the original content words and, conversely, what features they have lost.

キーワード：ポー・カレン語, カレン諸語, 文法化, 機能語, 助詞

Keywords: Pwo Karen, Karenic languages, grammaticalization, function word, particles

1. 序論
2. 内容語に由来する機能語
3. まとめ

1. 序論

本稿の目的は二つある。ポー・カレン語（英語の綴りは Pwo Karen または Poe Karen または Pho Karen）の機能語(function word)のうち内容語(content word)が文法

* 本稿の分析で用いたデータは主にカレン州バアン市(Hpa-an)出身の Saw Hla Chit 氏（1940 年代生まれ; 男性）、同じくカレン州バアン市(Hpa-an, Karen State)出身の Naw Snow Paw 氏(1980 年代生まれ; 女性)、モン州パウン市(Paung, Mon State)出身の Saw Khin Maung Aye 氏（1980 年代生まれ; 男性）から得たものである。いつも調査に辛抱強く協力してくれるカレン人の友人達にこの場を借りて感謝の意を表したい。

澤田英夫（編）『ビルマの少数民族言語に関する類型的・系統的俯瞰像の構築に向けて』（2025）. pp.89–133.
<https://doi.org/0002001131>.



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0) License.
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

化して生じたもののリストを作ることと、それら機能語と元になった内容語との統語論的違いを明らかにすることである。

本稿で扱うポー・カレン語は、ミャンマー連邦共和国のカレン州(英語では Karen State または Kayin State と綴る)の州都パアン市(Hpa-an)周辺で話される言語である(図1)。これをパアン方言(Hpa-an dialect)と呼ぶ。この方言は、ポー・カレン語に少なくとも四つある方言群すなわち、西部ポー・カレン語、トークリバン・ポー・カレン語、東部ポー・カレン語、北部ポー・カレン語のうち、東部ポー・カレン語に属す(Kato 2019b)。以降、ポー・カレン語と呼ぶのはこのパアン方言のことである。



図1 パアンの位置

ポー・カレン語はチベット・ビルマ諸語のカレン語群(Karenic)に属する言語である。カレン語群の諸言語は、SVOの基本語順を持つという点で、SOV型言語が圧倒的多数を占めるチベット・ビルマ諸語の標準的タイプから逸脱している。カレン系諸言語に共通する特徴については Kato (2021b)を参照していただきたい。ポー・カレン語は、①音節声調を持つ SVO 型の孤立語的単音節言語であり、②品詞には名詞・動詞・副詞・助詞・感嘆詞の5種類があり、③時制はなく、④前置助詞(=いわゆる前置詞)を用い、⑤名詞句を構成する基本的要素の順序は「所有者+名詞+状態動詞(=いわゆる形容詞)+数量句+指示語」であり、⑥名詞に対する関係節の位置には前置と後置が存在し、⑦動詞連続(名詞の介在を許さない連結型と介在を許す分離型がある)を持ち、⑧対句法(parallelism; elaborate expression)を多用し、⑨比較表現における基本的要素の順序は「状態動詞+マーカー+比較基準」である、といった類型的諸特徴を持つ。ポー・カレン語そのものの特徴の詳細については Kato (2019b)を参照されたい。

上記②に示したとおり、ポー・カレン語の品詞(=語類)には、名詞・動詞・副詞・助詞・感嘆詞の5種類がある(加藤 2004: 27-30)。感嘆詞は節を構成する要素にならない単語である。それ以外の単語は節を構成する要素になることができる。うち名詞には動詞の項になれるという性質がある。動詞は動詞の項になれるという点で名詞と同じ性質を持つが、動詞助詞(第2節参照)で修飾することができるという点で名詞と異なる。副詞は動詞の後に現れて動詞を修飾する単語である。加藤(2004)では助詞以外の名詞・動詞・副詞は単独で発話できるとし、そこから名詞と動詞を取り除いたものが副詞だとしたが、副詞の中には単独では発話しにくいものがある。より厳密には、分裂文の焦点位置に現れることができる単語のうち、名詞を除いたものが副詞である。助詞は他の単語がなければ発話を構成することができず、また分裂文の焦点位置に現れることもできない単語である。

感嘆詞は節の中の要素になれない特殊な品詞なのでここでの議論から除くとする。本稿では、残りの名詞・動詞・副詞・助詞のうち、名詞・動詞・副詞の三つを内容語と見なし、助詞を機能語と見なす。助詞すなわち機能語の中には、内容語が文法化することによって助詞になったものが少なからず見つかる。副詞に由来する助詞は今のところ見つかっていないので、ここで内容語と呼ぶのは実質的には名詞と動詞のみである。本稿では、内容語が文法化することによって発生したと考えられる機能語、すなわち名詞あるいは動詞に由来すると考えられる助詞について論じる。

Heine and Kuteva (2002: 2)によれば、文法化においては、(a)脱意味化(desemanticization)、(b)拡張(extension)、(c)脱範疇化(decategorialization)、(d)侵食(erosion)、という相互に関係する四つのメカニズムが働くという。脱意味化は元の意味の希薄化であり、拡張は新しい特徴の獲得であり、脱範疇化は元の特徴の減少であり、侵食は元の音声の変形である。ポー・カレン語の文法化にも、当然のことながらこの四つのメカニズムが観察される。個々のケースを見ていくと、侵食は必ず観察されるとは限らない。しかし、脱意味化・拡張・脱範疇化は個々のいずれのケースでも必ず観察される。

第2節では、内容語が文法化することによって発生したと考えられる機能語を見ていく。これまで、合計36個のそうした機能語が見つまっている。ひとつひとつの機能語について、元になったと考えられる内容語を挙げ、同時に音声を比較する。各々の機能語と内容語にはその意味を併記する。さらに、対応する機能語と内容語の統語的特徴を比較することによって、発生した機能語がどのような統語的特徴を獲得し、一方でどのような統語的特徴を消失したのかについて論じる。この論点は拡張と脱範疇化の問題であり、本稿で力点を置いた部分でもある。

なお、ポー・カレン語には19世紀以降の文献しかないため、本稿での文法化についての議論は、あくまでも現代語を観察した結果に基づいている。おそらく、本稿で扱う機能語以外にも、ポー・カレン語には文法化によって発生した機能語が多数あることが予想される。その中には、起源となった内容語が現代では使わ

れなくなったものもあることだろう。しかし、本稿では、元の内容語が現代でも使われている機能語に考察対象を絞った。記述言語学的に不確定な議論を避けるためである。

2. 内容語に由来する機能語

加藤(2004: 29–30)は、ポー・カレン語の助詞に、側置助詞(adpositional particle)、従属節助詞(subordinate clause particle)、名詞修飾助詞(noun modifying particle)、動詞助詞(verb particle)、副助詞(adverbial particle)、一般助詞(general particle)、文助詞(sentence particle)の7種を設定した。このうち側置助詞については、2.1の冒頭に述べる理由で、本稿において前置助詞(prepositional particle)と名称を改める。

これらは、統語的単位を文の中に導入する機能を持つか否かによって二つに分類することができる。表1に示した前置助詞と従属節助詞が、統語的単位を導入する機能を持つ助詞である。一方、表2に示した名詞修飾助詞・動詞助詞・副助詞・一般助詞・文助詞が、統語的単位を導入する機能を持たない助詞である。表1と表2は加藤(2004: 29)に示した表に基づくが、少し修正してある。

表1 統語的単位を導入する機能を持つ助詞

助詞の種類	何をするか
前置助詞	前置助詞句を作る
従属節助詞	従属節を作る

表2 統語的単位を導入する機能を持たない助詞

助詞の種類	何と共に現れるか
名詞修飾助詞	名詞句
動詞助詞	動詞
副助詞	動詞句、述語名詞句
一般助詞	名詞句、動詞句、従属節など
文助詞	文

表1に示した助詞は統語的単位を作って文の中に導入する。前置助詞は名詞句を導いて前置助詞句を作る。従属節助詞は従属節を作る。これらは前置助詞句(いわゆる前置詞句)と従属節という統語的単位を作って文中に導入する点で重要な働きを担っている。

一方、表2に示した助詞は様々な要素を修飾する機能を担っている。名詞修飾助詞は名詞句を修飾する機能を持つ。動詞助詞は動詞を修飾して様々な意味を付け加える。動詞助詞の中には使役態・適用態・中動態という態に関わる重要な助

詞も含まれている。副助詞は動詞句や述語名詞句を修飾して動詞句や述語名詞句を拡大する働きがある。一般助詞は、名詞句・動詞句・従属節など、様々な要素を修飾することのできる助詞である。文助詞は主に文末に現れて文を修飾する助詞である。

これらの助詞すなわち機能語の中には、内容語すなわち名詞あるいは動詞が文法化して発生したと見られるものが少なくない。以下では、前置助詞(2.1)、名詞修飾助詞(2.2)、動詞助詞(2.3)、従属節助詞(2.4)、副助詞(2.5)、一般助詞(2.6)の順で、名詞あるいは動詞が文法化して発生したと考えられる助詞について考察を行う。この順序は、名詞に関わりが深いか動詞に関わりが深いかを考慮して決めた。前置助詞・名詞修飾助詞は名詞と関わりが深く、動詞助詞・従属節助詞・副助詞は動詞と関わりが深い。一般助詞はどちらも関わりが深い。名詞と動詞それぞれに関わりの深いものを近くに配置して論じるのが理解しやすいと考えた。文助詞がこの中に含まれていないのは、文助詞だけは内容語由来のものが見つからなかったからである。

2.1. 前置助詞

前置助詞は、名詞句の前に現れて節中に主語・目的語以外の名詞句を導入する働きを持つ助詞である。加藤(2004)でこれを前置助詞と呼ばずに側置助詞と呼んだのは、名詞句の前に現れるものだけでなく、名詞句の前後に現れる *bê... θò* 「～のように」があったからである。つまり、これを *circumposition* と考えた。ところが、その後の研究の進展により、*bê... θò* の後部要素 *θò* は名詞の一種である関係名詞 (*relator noun*) の一つであり、正真正銘の助詞は前部要素の *bê* だけであると解釈するのが適切と考えるようになったため、側置助詞に含まれる助詞は名詞句の前に現れるものだけになった。そこで本稿では、側置助詞を前置助詞と呼ぶことにする。加藤(2004)は上記 *bê... θò* も含め全部で9個の側置助詞を挙げている。前置助詞と名称を変えた現在も総数は変わらない。このうち内容語由来の前置助詞は2個ある。

2.1.1. *thōN* 「～に」(場所)

前置助詞 *thōN* は場所(location)を表す。同じく場所を表す用法を持つ前置助詞 *lá* 「～に」(2)の例を参照)に比べると、場所をより狭く限定する働きを持つ。(1)の例を挙げる。

- (1) *ja yéiv ʔò thōN jò*
 1SG 家 ある LOC ここ
 私の家はここです。

この前置助詞は動詞 *thòN*「着く」に由来すると考えられる。この動詞は低平調で発音されるが、前置助詞 *thōN* は中平調である。したがって、文法化に際し、声調が替わったと考えられる。¹ (2)に動詞 *thòN* を用いた例を挙げる。

(2) *jə thòN lá θâiN khāN nó*
 1SG 着く LOC タイ 国 TOP

jə lə klə lə jā bə
 1SG 語る 理解する AST のだよ
 タイに来ていることをお伝えする次第です。

次に、前置助詞 *thōN* と動詞 *thòN* の違いについて検討する。音韻的には先に述べたように声調の違いがある。すなわち、元の動詞は低平調の *thòN* [11]だが、前置助詞は中平調の *thōN* [33]である。

統語的には、動詞助詞との共起可能性の違いがある。動詞助詞の中でも特に出現頻度が非常に高い *mə* (IRR)と *lə* (NEG)を用いて考えてみよう。これらは(2)の動詞 *thòN* には前置することができる。*jə mə thòN lá θâiN khāN*「私はタイに着く(だろう)」および *jə lə thòN lá θâiN khāN (bá)*「私はタイに着かなかったので」²に見るとおりである。しかし、(1)の *thōN* にこれらを前置した **jə yéiN ?ó mə thōN jò* および **jə yéiN ?ó lə thōN jò* は非文法的である。したがって、前置助詞 *thōN* は元の動詞の特徴を失っていると言える。また、*jə thòN* (1SG/着く)「私は着いた」という文を見ると、動詞 *thòN* には単独で述部を構成できるという特徴があることが分かる。これは動詞一般に当てはまる特徴である。そして、この文の *thòN* を *thōN* に替えて得られる文 **jə thōN* は非文法的である。したがって、前置助詞 *thòN* は単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴を失っていると言える。

一方で、前置助詞の *thōN* は動詞句内に現れるという、動詞にはない特徴がある。(1)の *thōN jò* は *?ó* を主要部とする動詞句の内部に現れている。動詞は別の動詞の目的語として動詞句内に現れることがあるが、この *thōN jò* は動詞 *?ó* の目的語ではない。したがって、前置助詞 *thōN* は動詞にはなかった特徴を獲得していると言える。

¹ ポー・カレン語の声調には、低平調 /à/ [11]、中平調 /ā/ [33(4)]、高平調 /á/ [55]、下降調 /ǎ/ [51]の四つがある。ポー・カレン語の音韻体系については Kato (2021a)を参照されたい。

² 否定辞 *lə* は主に従属節の否定で使われる形式である。和訳を「着かなかったので」としたのはそのためである。ただしこの訳は一例に過ぎない。他にも「着かなかったら」「着かなかったけれども」など様々な訳が可能である。否定辞 *lə* が現れた節の末尾には *bá* という形式が現れることが多い。いわゆる *double negation* である。*bá* を括弧内に入れたのは、この形式の出現が任意だからである。2.5.1の議論も参照されたい。

2.1.2. *báchâin* 「～について」

前置助詞 *báchâin* は「～について」という意味を表す。(3)に例を挙げる。後に *dá ló* 「～のみに」という単語列あるいは随伴者等を表す前置助詞 *dē* 「～と」を従えることがある。これらは残存した動詞特性とも言えるものであり、省略可能である。

(3) *jə mə lɔ̀pərân báθà nè báchâin (dá ló)*
 1SG IRR 知らせる たい 2SG ついて VPlim LOC

jə chəphàichəmà ʔəyāin θí chī ló
 1SG 仕事 事柄 PL CHI AST

あなたに私の仕事のことについてもお知らせしたいと思います。

この前置助詞は動詞 *báchâin* 「(～と) 関係がある」に由来する。(4)にこの動詞を用いた例を挙げる。

(4) *chəmú phjājò báchâin dē jə nān mèn ʔé*
 女 これ 関係がある DE 1SG NAN NCt NEG
 この女は俺とは何の関係もない。

次に、前置助詞 *báchâin* と動詞 *báchâin* の違いについて検討する。これらは音韻的には同一形である。

統語的には、2.1.1 で見たのと同様、前置助詞の *báchâin* は動詞助詞 *mə* (IRR) や *lə* (NEG) と共起しない。(3)の *báchâin* にこれらを前置した **jə mə lɔ̀pərân báθà nè mə báchâin jə chəphàichəmà ʔəyāin θí chī ló* および **jə mə lɔ̀pərân báθà nè lə báchâin jə chəphàichəmà ʔəyāin θí chī ló* は非文法的である。その点でこの *báchâin* は元の動詞の特徴を失っていると言える。これは、(4)の *báchâin* が *chəmú phjājò mə báchâin dē jə nān mèn* 「この女は俺と何か関係がある」および *chəmú phjājò lə báchâin dē jə nān mèn (bá)* 「この女は俺と何も関係がないので」のように *mə* と *lə* の前置を許すのと対称的である(否定辞 *ʔé* は *mə* および *lə* と共起しないので削除した)。また、*jə báchâin* (1SG/関係がある) 「私は(この件に)関係している」という文の *báchâin* は、「～について」という意味に取ることができない。したがって、前置助詞 *báchâin* は単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴を失っている。

一方で、やはり2.1.1 で見たのと同様、前置助詞 *báchâin* には動詞句内に現れるという特徴がある。(3)の *báchâin jə chəphàichəmà ʔəyāin θí* は、*lɔ̀pərân* を主要部とする動詞句内部に現れた要素である。したがって、前置助詞 *báchâin* は動詞にはなかった特徴を獲得していると言える。

2.2. 名詞修飾助詞

名詞修飾助詞は、名詞句に前置あるいは後置され、様々な意味を付け加えながら名詞句を拡張する機能を持つ助詞である。名詞句を節中に導入する働きを持つ前置助詞と異なり、名詞修飾助詞は名詞句の統語的機能を転換する働きを持たない。加藤(2004)は前部で17個の名詞修飾助詞を挙げている。このうち内容語由来の名詞修飾助詞は2個ある。

2.2.1. *láu* 「～とも」

名詞修飾助詞 *láu* 「～とも」は、数量を表す名詞句の後に現れ、「その数量全部」という意味を表す。(5)に例を挙げる。

- (5) *hə θè nó ʔéçhân ʔəθí ní yà láu ló*
 1PL PL TOP 愛着を感じる 3PL 二 NCh とも AST
 私達は彼ら二人ともに愛着を感じている。

この名詞修飾助詞は動詞 *láu* 「尽きる」に由来する。(6)にこの動詞を用いた例を挙げる。

- (6) *pēinchân nó nə θōŋ wái láu jàŋ və*
 お金 TOP 2SG 使う VPthr 尽きる PFV Q
 お金をお前は使いきってしまったのか？

次に、名詞修飾助詞 *láu* と動詞 *láu* の違いについて検討する。これらは音韻的には同一である。

統語的には、動詞助詞 *mə* (IRR)や *lə* (NEG)を名詞修飾助詞の *láu* の前に置くことはできない。**ʔəθí ní yà mə láu* と **ʔəθí ní yà lə láu* はどちらも非文法的である。これは(6)の *láu* が *pēinchân nó nə θōŋ wái mə láu və* 「お金をお前は使いきるだろうか」および *pēinchân nó nə θōŋ wái lə láu (bə) və* 「お金をお前は使いきらないのだろうか」のように *mə* と *lə* の前置を許すのと対称的である (*jàŋ* (PFV)は *mə* および *lə* と共起しにくいため削除した)。したがって、名詞修飾助詞 *láu* は元の動詞が持っていた特徴を失っていると言える。また、*pēinchân láu* (お金/尽きる)「お金がなくなった」という文の動詞 *láu* のような単独で述語を構成した *láu* には常に「尽きる」という意味が伴い、「全部」という意味だけを表すことができない。つまり、この *láu* の意味は名詞修飾助詞としての *láu* の表す意味と異なっている。このことから、名詞修飾助詞としての *láu* が単独で述部を構成できずにはできないと言える。すなわち、名詞修飾助詞 *láu* は単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴を失ったのである。

一方で、動詞 *láu* は、*là-láu* (月-尽きる)「月末」のような複合語で名詞の後につくことがあるものの、数量を表す名詞の後に接語されることはない。したがって、名詞修飾助詞 *láu* は元の動詞が持っていなかった新しい特徴を獲得していると言える。

2.2.2. *láudē* 「～のすべて」

名詞修飾助詞 *láudē* 「～のすべて」は、列挙された名詞句の前に現れ、それら名詞句が表すものすべてという意味を表す。(7)に例を挙げる。

(7) *láudē chaphóchəxā chaphóchəbòn θiləphá*
 すべて 動物 植物 PL

bá ʔán wé thilá nó thəmā ló
 (当為) 食う VPemp 塩 TOP もっぱら AST
 どんな動物も植物も一般的に塩が必要である。

この名詞修飾助詞は、動詞 *láu* 「尽きる」と随伴者・道具・列挙を表す前置助詞 *dē* 「～と、～で」が一体化したものである。動詞 *láu* 「尽きる」を用いた例は(6)を、前置助詞 *dē* を用いた例は(4)をご覧ください。

次に、名詞修飾助詞 *láudē* と動詞 *láu* の違いについて検討する。まず、*láudē* の第一音節と動詞 *láu* は音韻的には同一である。

統語的には、名詞修飾助詞 *láudē* は動詞助詞 *mə* (IRR)や *lə* (NEG) と共起することができない。**mə láudē chaphóchəxā chaphóchəbòn θiləphá* と **lə láudē chaphóchəxā chaphóchəbòn θiləphá* はどちらも非文法的である。したがって、*láudē* の *láu* は元の動詞が持っていた特徴を失っていると言える。また、2.2.1 で論じたのと同様に、*pēinchân láu* (お金/尽きる)「お金がなくなった」という文の *láu* が「列挙されたもののすべて」という意味を表すことはない。そもそも、*láudē* が単独で述部を構成することはない。したがって、名詞修飾助詞 *láudē* は単独で述部を構成できるという元の動詞としての特徴を失っているのである。

一方で、動詞 *láu* 「尽きる」が通常は前置助詞 *dē* に導かれた名詞句を取ることはないのに対し、名詞修飾助詞 *láudē* の *láu* は *dē* と共に名詞句を従える。この点でこの *láu* は元の動詞にはなかった特徴を獲得していると言える。

2.3. 動詞助詞

動詞助詞は動詞の前または後に置かれ、動詞に様々な意味を付け加える。一般的に「助動詞」と呼ばれる形式に相当する。動詞助詞の中には述語の項数を変更するものもある。加藤(2004)に挙げた 61 個の動詞助詞のうち、11 個が動詞の前に置かれるもの、50 個が動詞の後に置かれるものである。下に挙げる動詞助詞は、

2.3.1 から 2.3.7 までは動詞に前置されるもの、2.3.8 以降が動詞に後置されるものである。

なお、2.1.1、2.1.2、2.2.1、2.2.2 で用いた *mə* (IRR) と *lə* (NEG) の前置を動詞由来の動詞助詞の文法化のテストに使うことはできない。なぜなら、動詞に前置される動詞助詞の場合には、*mə* (IRR) と *lə* (NEG) の前置可能性が後に現れた動詞の特性である可能性があるからである。また、動詞に後置される動詞助詞の場合には、そもそも *mə* (IRR) と *lə* (NEG) が述語を形成する動詞複合体の中に割って入ることがないため、これをテストとして用いることができない。

内容語由来の動詞助詞は 26 個ある。

2.3.1. *bá* 「～しなければならない」

動詞助詞 *bá* 「～しなければならない」は動詞の前に置かれる。*bā* と発音されることもある。(8)に例を挙げる。当為を表すので「(当為)」という逐語訳を付す。

- (8) *jə bá l̩ lə yà ló jā bò*
 1SG (当為) 行く 一 NCh AST のだよ
 私は一人で行かなければならないのですよ。

この動詞助詞は動詞 *bá* 「当たる」に由来する。(9)にこの動詞を用いた例を挙げる。

- (9) *cúmuū bá dē xé*
 親指 当たる DE 包丁
 親指が包丁に当たってしまった。

次に、当為の動詞助詞 *bá* と動詞 *bá* の違いについて検討する。これらは音韻的には、動詞助詞 *bá* が高平調ではなく中平調の *bā* で発音されることがあるという点で異なる。動詞の *bá* は中平調では発音されない。

統語的には、動詞 *bá* は(9)のように後に前置助詞句を従えたり、後で見る(49)のように目的語名詞を従えることができる。しかし、動詞助詞 *bá* にはこのような特徴がない。そのため例えば *jə bá kā* (1SG/当たる/自動車)「私は自動車にぶつかった」の *bá* を当為の意味に解釈することは不可能である。したがって、動詞助詞の *bá* は元の動詞の特徴を失っていると言える。

一方で、連結型動詞連続³の第一動詞として動詞 *bá* が現れることは通常はないが(後で見る(49)の分離型動詞連続のように *bá* を第一動詞とし、第二動詞との間

³ ポー・カレン語の動詞連続には、名詞句などの介在を許さない連結型動詞連続(加藤 2004: 208–236)と介在を許す分離型動詞連続(加藤 2004: 236–257)とがある(英語では concatenated-type verb serialization と separate-type verb serialization)。連結型動詞連続は Aikhenvald and Dixon (2006: 37)の contiguous SVC に相当し、分離型動詞連続は non-contiguous SVC に相当する。ポー・カレン語の動詞連続は二個の動詞からなるものが最

に名詞が入る動詞連続は見つかっている)、動詞助詞 *bá* は(8)のように動詞を後に従える。さらに、この *bá* だけで述部を形成することはできない。例えば、(8)から動詞 *li* 以降を削除して *ja bá* とすることはできない。これは「私が(何かに)ぶつかった」という意味に取ることはできるが、当為の意味に取ることはできない。動詞が後に必ず現れるという点で、動詞助詞 *bá* は動詞にはなかった特徴を獲得していると言える。

2.3.2. *ye* 「徐々に～になる」

動詞助詞 *ye* 「徐々に～になる」は動詞の前に置かれる。状態動詞とのみ共起し、動詞が表す状態の変化が緩慢なことを表す。(10)に例を挙げる。この文では、状態の変化そのものは動詞 *main* 「太った」の後の *than* が表している。*than* については2.3.7を参照していただきたい。

- (10) *ja* *theta* *ʔakhajə* *la* *ni* *dē* *la* *ni*
 1SG も 今 一 日 そして 一 日
- ye* *main* *than* *ni* *pəv* *la* *phlōv* *jàv*
 徐々に 太った up 得る 予期せず 一 NCr PFV
 私も予期せず日一日と徐々に全身が太ってきました。

この動詞助詞は動詞 *ye* 「来る」に由来する。(11)にこの動詞を用いた例を挙げる。

- (11) *ʔəwə* *ye* *lé* *ʔə* *θə* *la* *yà* *yéin*
 3SG 来る LOC 3SG 友人 一 NCh 家
 彼はある友人の家に来た。

次に、動詞助詞 *ye* と動詞 *ye* の違いについて検討する。これらは音韻的には同一である。

統語的な観点からも見てみよう。動詞 *ye* は連結型動詞連続において通常、*ye* *ʔán*(来る/食べる)「食べに来る/食べてくる」のように、動態動詞と共起する。ポー・カレン語の動態動詞と状態動詞の分類については加藤(2004: 190–191)を参照されたい。しかし、動詞助詞 *ye* は(10)のように状態動詞と共起するという点で動詞の *ye* とは異なる。動詞助詞 *ye* は、動態動詞と共起し得るという元の動詞の特

も基本的と考えられる。本稿では、最初の動詞を第一動詞、次に現れた動詞を第二動詞と呼ぶ。ポー・カレン語の動詞連続において動詞は一部の例外を除いて時系列順に並ぶ。第二動詞が結果あるいは可能を表す場合に分離型動詞連続となる。

徴を失った一方で、状態動詞と共起し得るという元の動詞にはなかった特徴を獲得していると言える。

2.3.3. mà 「～させる」

動詞助詞 mà 「～させる」は動詞の前に置かれて使役を表す。2.3.3 から 2.3.6 までは挙げる動詞助詞、具体的には mà (2.3.3)、phílân (2.3.4)、lò (2.3.5)、kò (2.3.6)の四つは、使役を表す動詞助詞である。使役を表すという点で mà は、同じく使役を表す動詞助詞 dào (加藤[2004: 520]、加藤[2019])と共通するが、dào が意志動詞および無意志動詞のいずれとも共起するのに対し、mà は無意志動詞としか共起しない。⁴ 意味的には、mà が使役者の被使役行為に対する直接的制御を表し、dào が間接的制御を表すという点で異なる。(12)に mà 「～させる」の例を示す。

- (12) *jə mà pjò ʔəwé m̩*
 1SG CAUS 吐く 3SG ご飯
 彼にご飯を吐かせた。

この動詞助詞は動詞 mà 「する、行う」に由来する。(13)にこれが用いられた例を挙げる。

- (13) *lanjò jə mà kəlóʊn ké ʔé*
 今日 1SG する 仕事 成る NEG
 今日仕事をするのがとてもできない。

次に、動詞助詞 mà と動詞 mà の違いについて検討する。これらは音韻的には同一である。

統語的な観点からは、使役を表す動詞助詞一般に当てはまる議論をここでしておきたい。ポー・カレン語では、*dó θi* (叩く/死ぬ)「叩き殺す」のような「他動詞+自動詞」からなる連結型動詞連続が使役の意味を帯びる。しかし、加藤(2004: 518–520)と加藤(2019)に述べたように、このような連結型動詞連続はこの *dó θi* の例のように後部要素に自動詞しか現れることができない。ところが、使役を表す動詞助詞の後では、(12)の *pjò* 「吐く」のように他動詞が現れることができる。これをもって私は、2.3.3 から 2.3.6 に示す動詞助詞が文法化していると考え。使役を表す動詞助詞は、他動詞とも共起するという新しい特徴を獲得したのである。

一方で、使役を表す mà は単独で述部を構成することができない。「する、行う」の意味の mà は *jə mà* (1SG/する)「私はした」のように、単独で述部を構成することができる。しかし、*jə mà* という文は「私は(誰かに何かを)させた」という使役の意味を持つことができない。したがって、*nə mà θi thò v̩* (2SG/CAUS/死ぬ

⁴ 意志動詞と無意志動詞という動詞分類については加藤(2004: 187–189)を参照されたい。

豚/Q)「お前は豚を殺したか？」という質問に対して、*jə mə* とだけ言って答えることができない。*jə mə θi*「私は殺した」と言う必要がある。言い換えると、使役を表す *mà* は単独で述部を構成することができる機能を失ったと見ることができる。単独で述部を構成することができないという事実も、2.3.3 から 2.3.6 に示す動詞助詞すべてに共通する特徴である。

2.3.4. *phílân* 「～させてやる」

動詞助詞 *phílân*「～させてやる」は動詞の前に置かれる。使役を表すが、*mà* (2.3.3)とは違い、被使役者にとっての受益の意味が加わるのがこの動詞助詞の特徴である。この動詞助詞は無意志動詞とも意志動詞とも共起する。(14)に例を挙げる。これは意志動詞と共起した例である。

- (14) *jə phílân jāin ʔəwé cépēin*
 1SG CAUS 踏む 3SG 自転車
 私は彼に自転車をこがせてやった。

この動詞助詞は動詞 *phílân*「与える」に由来する。(15)にこれを用いた例を挙げる。

- (15) *jə phílân təwáphjā láiʔəv*
 1SG 与える 学生 本
 私は学生に本をやった。

次に、動詞助詞 *phílân* と動詞 *phílân* の違いについて検討する。これらは音韻的には同一である。

統語的には、2.3.3 で論じたように、使役を表す動詞助詞は他動詞と共起できるという特徴がある。(14)の *jāin*「踏む」がその例である。したがって、動詞助詞 *phílân* は他動詞が後に現れてもよいという特徴を獲得したと見ることができる。

一方で、*jə phílân* (1SG/与える) という文は、「私は与えた」という意味を表すことができるが、「私は(誰かに何かを)させてやった」という使役の意味を表すことができない。したがって、単独で述部を構成できる元の動詞の機能を失ったと見ることができる。

2.3.5. *lò* 「語って～させる」

動詞助詞 *lò*「語って～させる」は動詞の前に置かれる。使役を表すが、*mà* (2.3.3)とは違い、使役行為が「語る」という動作に限定されるのがこの動詞助詞の特徴である。この動詞助詞は無意志動詞としか共起しない。(16)に例を挙げる。

- (16) *chə lə náθí hə jàv*
 IPS CAUS 理解する 1SG PFV

みんなが私達に話して分からせようとしている(=アドバイスをくれる)。

この動詞助詞は動詞 *lə*「語る」に由来する。(17)にこれが用いられた例を挙げる。

- (17) *ja lì lə ʔə*
 1SG 行く 語る 3SG

私は彼に言いに行った。

次に、動詞助詞 *lə* と動詞 *lə* の違いについて検討する。これらは音韻的には同一である。

統語的には、2.3.3 で論じたように、使役を表す動詞助詞は他動詞と共起できるという特徴がある。(16)の *náθí*「理解する」がその例である。したがって、動詞助詞 *lə* は、使役の意味を帯びた述部において他動詞を後に従えることができるという特徴を獲得したと見ることができる。

一方で、*ja lə*(1SG/語る)という文は、「私は語った」という意味を表すことはできるが、「私は(誰かに)語って(何かを)させた」という使役の意味を表すことができない。したがって、単独で述部を構成できる元の動詞の機能を失ったと見るすることができる。

2.3.6. *kò*「呼んで～させる」

動詞助詞 *kò*「呼んで～させる」は動詞の前に置かれる。使役を表すが、*mà*(2.3.3)とは違い、使役行為が「呼ぶ、呼びかける」という動作に限定されるのがこの動詞助詞の特徴である。

- (18) *ja kò ʔán ʔəwé mì*
 1SG CAUS 食べる 3SG ご飯

私は彼を呼んでご飯を食べさせた(=食事に招待した)。

この例は誰かを呼び寄せて「食べる」という意志的動作を行わせる状況を表しているが、動詞助詞 *kò* は、*kò nán thán*(CAUS/目覚める/VPup)「呼びかけて目覚めさせる」のように、呼びかけて無意志的動作を引き起こす場合にも用いられる。

この動詞助詞は動詞 *kò*「呼ぶ」に由来する。(19)にこの動詞を用いた例を挙げる。

- (19) *mə kò dē wē lə phlóon ló chí*
 IRR 呼ぶ DE 兄 一 NCr AST CHI
 (これからはあなたを) お兄さんとだけ呼ぶことにするわ。

次に、動詞助詞 *kò* と動詞 *kò* の違いについて検討する。これらは音韻的には同一である。

統語的には、2.3.3 で論じたように、使役を表す動詞助詞は他動詞と共起できるという特徴がある。(18)の *ʔán*「食べる」がその例である。したがって、動詞助詞 *kò* は、使役の意味を帯びた述部において他動詞を後に従えることができるという特徴を獲得したと見ることができる。

一方で、*ja kò* (1SG/呼ぶ)という文は、「私は呼んだ」という意味を表すことができるが、「私は(誰かを)呼んで(何かを)させた」という使役の意味を表すことができない。したがって、単独で述部を構成できる元の動詞の機能を失ったと見ることができる。

2.3.7. *thán*「上方向に～する」

動詞助詞 *thán*「上方向に～する」は動詞の後に置かれる。*lán* あるいは *ʔán* とも発音される。(20)に例を挙げる。

- (20) *thóphóliphó thilaphá jù thán wé θàuyánʔà mā ló*
 鳥類 PL 飛ぶ VPup VPemp 騒々しい 非常に AST
 鳥たちが非常に騒々しく飛び上がった。

この動詞助詞は、上方向を表す用法の他にも重要なものとして、*ʔán thán* (食べる/VPup)「食べ始める」や *ʔá thán* (多い/VPup)「多くなる」のように開始を表す用法、*θò thán* (着る[または着ている]/VPup)「身につける」のように意味を動作に限定する用法などを持つ(詳細については Kato [2022b]を参照されたい)。

この動詞助詞は動詞 *thán*「上がる」に由来する。(21)にこの動詞を用いた例を挙げる。

- (21) *thí thán*
 水 上がる
 水位が上がった。

次に、動詞助詞 *thán* と動詞 *thán* の違いについて検討する。音韻的には、動詞助詞 *thán* が *lán* あるいは *ʔán* とも発音されるのに対して、動詞 *thán* は *thán* としか発音されることがないという点で異なる。

統語的には、動詞 *thán* は *thán lá yéin phàn* (上がる/LOC/家/中)「家の中に上がる」のように着点を表す語句を後に取りることができるが、動詞助詞の *thán* にこの機能はない。その点で元の動詞の特徴を失ったと考えることができる。

一方、動詞 *thán* が他の動詞の後に現れて連結型動詞連続を形成することはない。上に挙げた *jù thán* (飛ぶ/VPup)「飛び上がる」や *?án thán* (食べる/VPup)「食べ始める」や *?á thán* (多い/VPup)「多くなる」のような例では、一見、動詞 *thán* が連結型動詞連続の二番目の要素として現れているようにも見えるが、これらは *lán* または *kán* と発音することができることから、動詞助詞である。すなわち、動詞助詞 *thán* は動詞の後に現れることができるという点で、元の動詞にはない新たな特徴を獲得したと言える。

2.3.8. *làn* 「下方向に～する」

動詞助詞 *làn* 「下方向に～する」は動詞の後に置かれる。(22)に例を挙げる。

- (22) *jə mə cáin làn thōn jò*
 1SG IRR 歩く VPdn LOC ここ
 私はここで(バスから)降ります。

この動詞助詞は、下方向を表す用法の他にも重要なものとして、*è làn* (少ない/VPdn)「少なくなる」のように開始を表す用法、*kú làn* (剥く/VPdn)「剥く」のように強調を表す用法などを持つ(詳細は Kato [2022b]を参照)。

この動詞助詞は動詞 *làn* 「下がる、下りる」に由来する。(23)にこの動詞を用いた例を挙げる。

- (23) *thí lán jàv*
 水 下がる PFV
 (洪水の)水が引き始めた。

次に、動詞助詞 *làn* と動詞 *làn* の違いについて検討する。音韻的には、動詞助詞 *làn* が *kàn* と発音されるのに対して、動詞 *làn* は *làn* としか発音されることがないという点で異なる。

統語的には、動詞 *làn* は *làn chái* (下りる/水田)「水田に下りる」のように着点を表す語句を後に取りることができるが、動詞助詞の *làn* にこの機能はない。その点で元の動詞の特徴を失ったと見ることができる。

一方、動詞 *làn* が他の動詞の後に現れて連結型動詞連続を形成することはない。上に挙げた *cáin làn* (歩く/VPdn)「降りる」や *kú làn* (剥く/VPdn)「剥く」や *è làn* (少ない/VPdn)「少なくなる」のような例では、一見、動詞 *làn* が現れているようにも見えるが、これらは *kàn* と発音することができることから、動詞助詞である。

すなわち、動詞助詞 *làn* は動詞の後に現れることができるという点で、元の動詞にはない新たな特徴を獲得したと言える。

2.3.9. *thàin* 「～しかえす」

動詞助詞 *thàin* 「～しかえす」は動詞の後に置かれる。ある人物に対してその人が自分にしたのと同じ行為を行うことを表す。*ɤàin* とも発音される。前に音節末子音 *n* が現れた場合には *dàin* あるいは *làin* と発音されることもある。(24)に例を示す。

- (24) *xíphàn jō thàin khléinθàvcà mòlàimòlàì*
 (人名) 見る THAIN (人名) にやにや

ファイブンはクレインタワーをにやにやしながら見かえした。

この動詞助詞は、「～しかえす」を表す用法以外にも、*ʔókí thàin* (置く/THAIN) 「(元の場所に)戻す」のように元の位置への移動を表す用法や、*bá màlú thàin láì* ((当為/学ぶ/THAIN/文字)「文字を繰り返し勉強しなければならない」のように繰り返すを表す用法や、*jə dòn nī thàin ʔəpí lə yà jò* (1SG/妊娠する/得る/THAIN/末子/一/NCh/この) 「(そのとき)今度はこの末っ子を妊娠しました」のように事象が累加的に生起することを表す用法などを持つ(加藤 [2004: 301–304])。

この動詞助詞は動詞 *thàin* 「帰る」に由来する。(25)にこの動詞を用いた例を挙げる。

- (25) *ʔəwé thàin lú ʔə thíkhān ʔò*
 3SG 帰る LOC 3SG 国 あの
 彼は自分の国に帰った。

次に、動詞助詞 *thàin* と動詞 *thàin* の違いについて検討する。音韻的には、動詞助詞 *thàin* は *ɤàin* とも発音されるが、動詞 *thàin* がこのように発音されることはない。

統語的には、動詞 *thàin* には(25)のように着点を表す語句を後に従えることのできる機能があるが、動詞助詞 *thàin* にこの機能はない。したがって、元の動詞の機能を失ったと見ることができる。また、動詞 *thàin* は、*jə thàin* (1SG/帰る) 「私は帰った」に見るように、単独で述部を構成することができる。しかし、この文が「私は(何かをし)かえした」の意味を表すことはない。したがって、動詞助詞 *thàin* は、単独で述部を構成することができる元の動詞の特徴を失っていると見るができる。

一方で、動詞 *thàin* が他の動詞の後に現れて連結型動詞連続を形成するのは、*yé thàin* (来る/帰る) 「帰って来る」や *lì thàin* (行く/帰る) 「帰って行く」のように、移

動を表す動詞と共起した場合のみである。この *thàin* は *thàin* とだけ発音されるため、動詞 *thàin* であると考えられる。しかし、動詞助詞 *thàin* は、上に示した *jō thàin* (見る/THAIN)「見かえす」や *ʔókí thàin* (置く/THAIN)「戻す」や *màló thàin* (学ぶ/THAIN)「繰り返し勉強する」や *də̀n nī thàin* (妊娠する/得る/THAIN)「今度は(別の子を)妊娠した」といったいくつかの例のように、様々な動詞と共起することができる。これらは一見、動詞の *thàin* であるようにも見えるが、*kàin* と発音することが可能であることから、動詞助詞である。様々な動詞の後に現れるという点で、動詞助詞 *thàin* は元の動詞にはなかった新たな特徴を獲得したと見ることができる。

2.3.10. *kədà* 「逆向きに～する」

動詞助詞 *kədà* 「逆向きに～する」は動詞の後に置かれる。動作が通常あるいはこれまでとは逆方向に行われることを表す。(26)に例を示す。

- (26) *thàv kədà θá chā bádàbádà*
 動かす 逆向きに もう 物 ほどほどに
 物を逆向きに動かすのはほどほどにしる。(「ごまかすのもほどほどにしる」という意味でよく使う)

この動詞助詞は名詞 *kədà* 「裏側」に由来する。(27)にこの名詞を用いた例を挙げる。

- (27) *bá lá kədà*
 当たる LOC 裏側
 (服が)裏返しになった。

次に、動詞助詞 *kədà* と名詞 *kədà* の違いについて検討する。これらは音韻的には同一である。

統語的には、名詞の *kədà* は(27)のように前置助詞の後に現れることができる。この *kədà* は名詞だから当然のことである。しかし、逆方向を表す *kədà* にこのような用法はない。これは名詞としての特徴を失っているためと見ることができる。

一方、(26)で動詞助詞 *kədà* は目的語 *chā* 「物」より動詞に近い位置に現れている。名詞の *kədà* は、名詞であるからこそこのような位置に現れることがない。目的語より動詞に近い位置に現れ得るのは、動詞助詞 *kədà* が、動詞を修飾するという新しい機能を獲得したためと見ることができる。

2.3.11. θân 「～したばかり」

動詞助詞 θân 「～したばかり⁵」「近い過去に～した」は動詞の後に置かれる。

- (28) *lú tòuntóun lì thán θân θâin khān khá dá?ò ...*
 LOC お母さん 行く VPup ばかり タイ 国 時 (過去)
 お母さんがタイに行ったばかりの頃は...

この動詞助詞は動詞 θân 「新しい」に由来する。(29)にこの動詞の例を挙げる。

- (29) *thí θân yáŋkhó θân*
 水 新しい 土 新しい
 水が新しく、土が新しい(=環境が変わった)。

次に、動詞助詞 θân と動詞 θân の違いについて検討する。これらは音韻的に同一である。

さらに統語的な側面から見てみよう。動詞 θân が連結型動詞連続の成分として他の動詞の後に現れるのは、通常、*phwîn θân châin* (開ける/新しい/店)「店を新装開店する」のように、「他動詞+自動詞」という組み合わせの第二要素として現れ、述語全体が「～を新しくする」の意を表す場合である。しかし、動詞助詞 θân は様々な動詞の後に現れる。(28)では、*lì thán* (行く/VPup)「上がって行く」という自動詞相当の要素の後に現れている。他にも、*dá θân* (見つける/ばかり)「見つけたばかり」、*thòn θân* (着く/ばかり)「着いたばかり」、*dó thán θân* (大きい/VPup/ばかり)「大きくなったばかり」、*chəchə̀n làn θân* (雨/下りる/ばかり)「雨季になったばかり」などのように、様々な動詞と共起することができる。これは動詞助詞 θân が新しい機能を獲得したためと見ることができる。

一方で、「～したばかり」を表す θân が(29)のように単独で述部を構成することはない。これは、単独で述部を構成することのできる元の動詞の特徴を失っているためと考えることができる。

2.3.12. jō 「～してみる」

動詞助詞 jō 「～してみる」は動詞の後に置かれる。(30)に例を示す。「(試行)」という逐語訳を付しておく。

⁵ 日本語で「～したばかり」は全体として名詞性を帯びる。ポー・カレン語の θân に述語を名詞化する働きはないので注意されたい。和訳「～したばかり」はあくまで意味的に対応する日本語を挙げたまでであり、ポー・カレン語 θân の統語特性とは無関係である。

- (30) *pō jō lái nō*
 読む (試行) 本 その
 その本を読んでみなさい。

この動詞助詞は動詞 *jō* 「見る」に由来する。(31)にこの動詞が用いられた例を挙げる。

- (31) *jō ɲawé*
 見る 3SG
 彼を見なさい。

次に、動詞助詞 *jō* と動詞 *jō* の違いについて検討する。これらは音韻的には同一である。

統語的には、動詞 *jō* は(31)の例のように目的語を取ることができるが、動詞助詞の *jō* は独自の目的語を取ることができない。(30)が表す状況では、動作者が「本」を見てもいるから *lái* 「本」が *jō* の目的語であるという解釈の余地があるかもしれない。しかし、*chóphá jō thō* (暗唱する/(試行)/経)「経を暗唱してみた」においては、経を見ていないのだから *thō* 「経」が *jō* の目的語でないのは明らかである。したがって、動詞助詞の *jō* は目的語を取ることができないという点で元の動詞の特徴を失っている。また、*jō jō* (1SG/見る)「私は見た」という文は、「私は(何かをして)みた」という試行の意味に取ることができない。したがって、動詞助詞 *jō* は単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴を失っている。

一方で、*xwè jō chəyàn* (買う/見る/絵)「絵を買って眺めた」のような連結型動詞連続で動詞 *jō* は何かを見ることを目的とした動作を表す動詞(ここでは *xwè*)としか共起できないが、⁶ 動詞助詞 *jō* は、*thəuŋlī jō* (踊る/(試行))「踊ってみる」のように、そのような動作に限定されない様々な動作を表す動詞と共起できる(何かを見るために踊るということは通常はないだろう)。すなわち、動詞助詞 *jō* は、共起できる動詞の種類が拡大しているため、元の動詞にはなかった特徴を獲得したと見ることができる。

2.3.13. *jōwá* 「～してみる」

動詞助詞 *jōwá* 「～してみる」は動詞の後に置かれる。*jōkhwā* あるいは *jōwā* とも発音される。*jōwá* と発音されることが多いように思われるので、*jōwá* を代表形として挙げておく。2.3.12に挙げた *jō* と意味的にほとんど違いがないが、この *jōwá* のほうが *jō* より使われる頻度が高いように思われる。(32)に例を示す。ここでも「(試行)」という逐語訳を付す。

⁶ これは、連結型動詞連続の第一動詞と第二動詞が表す事象間には緊密な意味関係が存在しなければならないからである(加藤 2004: 210–211)。意志動詞が連結した場合、第二動詞が目的を表すのが一般的である。

- (32) *nə lə jōwá jə nān thí xō*
 2SG 語る (試行) 1SG NAN 回 よ
 僕にちょっと言ってみてよ。

この動詞助詞は動詞 *jōkhwā* 「観察する、良く見る、世話する」に由来する。(33)にこの動詞が用いられた例を挙げる。

- (33) *nə jōkhwā chələpá jə θí bálé bə*
 2SG 観察する 近辺 この も なぜ よ
 このあたりも観察しなさいよ。

次に、これら動詞と動詞助詞の違いについて検討する。動詞助詞には *jōwá* あるいは *jōwā* という発音があるが、動詞 *jōkhwā* にはそのような発音がない。これが音韻的な違いである。

統語的には、動詞 *jōkhwā* は(33)のように目的語を取ることができるが、動詞助詞の *jōwá* は独自の目的語を取ることができない。意味的に考えて、(32)の *jə* (1SG) を *jōwá* の目的語と解釈することはできないだろう。すなわち、動詞助詞の *jōwá* は目的語を取ることができるという元の動詞の特徴を失っている。また、*jə jōkhwā* (1SG/世話する) 「私は世話した」という文は「私は(何かをして)みた」という試行の意味を表さない。したがって、動詞助詞の *jōwá* は単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴を失っている。

一方で、動詞 *jōkhwā* は、もし連結型動詞連続の第二要素として現れたなら、*phón jōkhwā thó* (捕まえる/観察する/鳥) 「鳥を捕まえて観察する」のように、何かを観察することを目的とする動作を表す動詞(ここでは *phón*)としか共起しない。一方で、動詞助詞の *jōwá* は、*théunlī jōwá* (踊る/(試行)) 「踊ってみる」のように、そのような解釈とは関係のない動詞と共起することができる。すなわち、動詞助詞 *jōwá* は、共起できる動詞の種類が拡大しているため、元の動詞にはなかった特徴を獲得したと見ることができる。

2.3.14. *γú* 「こっそり～する」

動詞助詞 *γú* 「こっそり～する」は動詞の後に置かれる。人目に触れずに動作を行うことを表す。似た意味の動詞助詞に *θú* 「こっそり～する」があるが、*γú* は規則や法律に反する場合に特化して使われる。(34)に例を示す。

- (34) *náv yú khán phàn*
 入る こっそり 国 中
 不法に入国する。

この動詞助詞は動詞 *ʔányú*「盗む」に由来する。第一音節の *ʔán* は動詞 *ʔán*「食べる」に由来する形式で、様々な動詞の第一音節に現れる。⁷ 元来の機能はいまだ不明である。この形式で始まる動詞の中には、少数ながら、*ʔánbú*「育てる」と *bú*「育てる」のように、第一音節を除去しても使うことのできる動詞がある。このことは、*ʔán* が昔は動詞本体とは独立した形態素だったことを物語る。現在のポー・カレン語では、*ʔányú* の第一音節を除去することはできないが、おそらくこの動詞が「こっそり～する」の意の動詞助詞として使われるようになった時代においては、第一音節を除去することができたか、あるいは第一音節そのものが存在しなかったのだろう。(35)に *ʔányú*「盗む」の例を挙げる。

- (35) *chə ʔányú jə cépēin*
 IPS 盗む 1SG 自転車
 誰かが僕の自転車を盗んだ。

次に、動詞助詞 *yú* と動詞 *ʔányú* の違いについて検討する。音韻的には、動詞助詞 *yú* には第一音節 *ʔán* の部分がないという点で動詞 *ʔányú* と大きく異なる。

統語的には、動詞 *ʔányú* は(35)の例のように目的語を取ることができ、動詞助詞の *yú* は(34)の例から分かるように、独自の目的語を取らない。この例に *khán phàn* 以外の目的語が現れることはできない。したがって、動詞助詞 *yú* は元の動詞の特徴を失っている。また、動詞助詞 *yú* は *jə ʔányú* (1SG/盗む)「私は盗んだ」の *yú* の位置に代入することができない(**jə yú*)。つまり、単独で述部を構成する機能を失っている。

一方、動詞 *ʔányú* が何らかの動詞の後に現れて連結型動詞連続を形成するとしたら、*lì ʔányú* (行く/盗む)「盗みに行く」のように、何かを盗むことを目的とした動作を表すような動詞(ここでは *lì*)としか共起しない。しかし、動詞助詞の *yú* は *tháwnlī yú* (踊る/こっそり)「こっそり踊った」のように、そのような動作に限定されない動作を表す動詞と共起できる。したがって、共起できる動詞の種類が増えているという点で動詞助詞 *yú* は新しい特徴を獲得したと見ることができる。

⁷ 他に、*ʔánphôn*「煮る」、*ʔánmân*「命令する」、*ʔánphlū*「(頭を)洗う」、*ʔánlá*「叱る」、*ʔánjâ*「謝る」、*ʔánxú*「探す」、*ʔánbú*「育てる」など、*ʔán* で始まる様々な動詞が存在する。なお、系統的に極めて近いスゴー・カレン語には対応する動詞において *ʔán* に相当する音節が現れない。例えば、*ʔányú*「盗む」と同源の動詞はスゴー・カレン語で *hí*「盗む」である。したがって、これらの動詞の第一音節はスゴー・カレン語とポー・カレン語の共通の祖語まで歴史を遡れない可能性がある。一方、スゴー・カレン語の *hí* も *ʔá hí* (食べる/こっそり)「こっそり食べる」のように動詞助詞として使われるから、動詞助詞 *yú* の歴史はスゴー・カレン語との祖語まで遡れる可能性がある。

2.3.15. khwái 「～してしまう」

動詞助詞 khwái 「～してしまう」は動詞の後に置かれる。動作が徹底的に行われることや状態変化が完全に生じることを表す。しばしば wái と発音される。(36)に例を挙げる。

- (36) *lòN khwái thwí nāN thí*
 追う VPthr 犬 NAN 回
 犬を徹底的に追いかける。

この例は動作が徹底的に行われることを khwái が表している例だが、*yàYòN khwái* (壊れる/VPthr) 「完全に壊れた」では状態変化が完全に生じたことを表している。

この動詞助詞は動詞 khwái 「投げる」に由来する。(37)にこの動詞が使われた例を挙げる。

- (37) *khwái lōUN*
 投げる 石
 石を投げよ。

次に、動詞助詞 khwái と動詞 khwái の違いについて検討する。音韻的には、動詞助詞 khwái はしばしば wái と発音されるが、動詞 khwái がこのように発音されることはない。

統語的には、動詞 khwái は(37)のように目的語を取ることができるが、動詞助詞 khwái は独自の目的語を取ることができない。(36)の *thwí* 「犬」を khwái の目的語と解釈することはできないだろう。したがって、動詞助詞 khwái は元の動詞 khwái の特徴を失っている。また、*jə khwái* (1SG/投げる) 「私は投げた」という文は、「私は(徹底的に何かをして)しまった」という意味に取ることができない。したがって、動詞助詞 khwái は単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴を失っている。

一方、動詞 khwái が連結型動詞連続の第二動詞として現れた場合、*lī khwái lōUN* (行く/投げる/石) 「石を投げに行く」のように、意志動詞としか共起しない。ポー・カレン語の連結型動詞連続では、第一動詞と第二動詞の意志性が一致するのが一般的だからである(加藤 2004: 217–218)。しかし、動詞助詞の khwái は、*yàYòN khwái* (壊れる/VPthr) 「完全に壊れた」のように、無意志動詞とも共起する。すなわち、共起できる動詞の種類が拡大しているという点で動詞助詞 khwái は新しい特徴を獲得したと見ることができる。

2.3.16. *ɛ̀ə̀u* 「予期せず～してしまう」

動詞助詞 *ɛ̀ə̀u* 「予期せず～してしまう」は動詞の後に置かれる。事象の生起が想定外だったことを表す。(38)に例を示す。*ɛ̀ə̀u* には「(想定外)」という逐語訳を付す。

- (38) *jə θáɪ khó nɔ́ pí ɛ̀ə̀u*
 1SG 切る 頭 したところ 短い (想定外)
 私は (床屋で) 髪の毛を切ったら思いがけず短くなってしまった。

この動詞助詞は動詞 *ɛ̀ə̀u* 「驚く」に由来する。大きな音や突然の出来事に驚くことを表す。(39)にこの動詞が用いられた例を挙げる。

- (39) *jə ɛ̀ə̀u mā lí*
 1SG 驚く 非常に AST
 ああ驚いた。

次に、動詞助詞 *cə̀u* と動詞 *ɛ̀ə̀u* の違いを検討する。音韻的にこの二つは同一である。

統語的には、動詞 *ɛ̀ə̀u* が(39)のように主語として有生物主語しか取らないのに対して、動詞助詞 *ɛ̀ə̀u* が修飾する動詞の主語は通常(38)のように無生物主語(この場合は「髪の毛」)であることが異なる。すなわち、動詞助詞 *ɛ̀ə̀u* は、有生物主語のみと共起するという元の動詞の特徴を失い、逆に、無生物主語のみと共起するという特徴を獲得したと見ることができる。

また、動詞の *ɛ̀ə̀u* は *jə ɛ̀ə̀u* (1SG/驚く)「私は驚いた」のように単独で述部を構成することができるが、想定外であることを表す *ɛ̀ə̀u* は単独で述部を構成することができない。例えば、*khóθú pí ɛ̀ə̀u* (髪の毛/短い/(想定外))「髪の毛が短くなってしまった」から *pí* を取り去って *khóθú ɛ̀ə̀u* とすることはできない。したがって、動詞助詞の *ɛ̀ə̀u* は単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴を失っている。

2.3.17. *kòuɴ* 「皆で集まって～する」

動詞助詞 *kòuɴ* 「皆で集まって～する」は動詞の後に置かれ、集まって何かを行うことを表す。(40)に例を挙げる。

- (40) *təwáɴphóchā θè lə̀thàɪɴ kòuɴ chā*
 村人 PL 語る 集まって 物
 村人たちは (会議を開いて) 議論した。

この動詞助詞は動詞 *kòuN* 「集まる」に由来する。(41)にこの動詞を用いた例を挙げる。

- (41) *kòuN jàv bá*
 集まる PFV Q
 (お前たちは) 集まったか?

次に、動詞助詞 *kòuN* と動詞 *kòuN* の違いについて検討する。この二つは音韻的には同一である。

これらの統語的な違いは、自動詞 *kòuN* は他動詞の後に現れることができないが、動詞助詞 *kòuN* は他動詞の後に現れることができるという、出現可能な環境の違いである。(40)の *kòuN* がもし動詞だとしたら、(40)には *lòthàin kòuN* (語る/集まる)という「他動詞+自動詞」という組み合わせからなる連結型動詞連続が現れていることになる。しかし、ポー・カレン語の連結型動詞連続では、「他動詞+自動詞」という連続においては、第一動詞の目的語項と第二動詞の主語項が通常は同一になる(加藤 2004: 211–213)。例えば、*dó θi thò* (叩く/死ぬ/豚)「豚を叩き殺す」という動詞連続では、*thò*「豚」という同一の名詞句が *dó*「叩く」の目的語項と *θi*「死ぬ」の主語項として共有されている。もし、(40)の *lòthàin kòuN* が動詞連続だとしたら、意味的に考えて *lòthàin* の主語も *kòuN* の主語も「村人たち」であるはずだが、このような、「他動詞+自動詞」の組み合わせでかつ二つの動詞の主語が同一であるような連結型動詞連続はポー・カレン語では容認されない(加藤 2004: 223)。例えば、**?án chîtháun* (食べる/立つ)「意図した意味: 食べてから立つ」は不適格である。すなわち、(40)の動詞助詞 *kòuN* は、他動詞の後という本来は現れることのできない環境に現れている点で、元の動詞の *kòuN* とは異なる特徴を獲得していると見ることができる。

一方で、例えば *?əθi kòuN* (3PL/集まる)という文は「彼らは集まった」という意味を表すが、「彼らは集まって何か別のことをした」という状況を少なくとも意味論的には表さない。したがって、動詞助詞 *kòuN* は単独で述部を構成できるという元の特徴を失っていると見ることができる。

2.3.18. *chón* 「無理やり～する」

動詞助詞 *chón* 「無理やり～する」は動詞の後に置かれる。本来は状況的に実行不可能なあるいは実行困難な行為を無理に行うことを表す。(42)に例を示す。

- (42) *bá ?án chón mì jā bò*
 (当為) 食べる 無理に ご飯 のだよ
 (朝ご飯は食べたくなくても) 無理に食べなくてはなりませんよ。

この動詞助詞は動詞 *chón* 「強い、激しい」に由来する。(43)にこの動詞が用いられた例を挙げる。

- (43) *ʔə yāiN chón mā*
 3SG 力 強い 非常に
 彼の力は非常に強い。

次に、動詞助詞 *chón* と動詞 *chón* の違いについて検討しよう。二つは音韻的には同一である。

統語的には、2.3.17 で論じたのと同様、これらが出現できる環境が異なる。(42) の *ʔán chón* の二番目の要素がもし「強い」を意味する自動詞だとすると、*ʔán* 「食べる」が他動詞で *chón* が自動詞だから、*chón* の主語項は *mì* 「ご飯」でなければならない。しかし、意味的に考えれば、*chón* 「強い」の主語は *ʔán* 「食べる」の主語と同一だろう。ところが、2.3.17 で論じたように、「他動詞+自動詞」の組み合わせでかつ二つの動詞の主語が同一であるような連結型動詞連続はポー・カレン語では容認されない。すなわち、(42)の *chón* は他動詞の後という本来は現れることのできない環境に現れているという点で、動詞の *chón* とは異なる特徴を獲得していると見ることができる。

一方、*ʔəwê chón* (3SG/強い) 「彼は (力が) 強い」という文は、「彼は (何かを無理やり) した」という意味を表さない。したがって、動詞助詞の *chón* は単独で述部を構成するという元の動詞が持つ特徴を失っていると言える。

2.3.19. *báθà* 「～したい」

動詞助詞 *báθà* 「～したい」は動詞の後に置かれる。主語が表す有生物の、動詞が表す事象の実現に対する希望を表す。*wáθà* あるいは *káθà* とも発音される。(44)に例を挙げる。

- (44) *jə mə dɔ́ báθà nə*
 1SG IRR 殴る たい 2SG
 俺はお前を殴りたい。

この動詞助詞は動詞 *báθà* 「欲する」に由来する。(45)にこれが用いられた例を挙げる。

- (45) *nə báθà nə mən dái ʔé ká*
 2SG 欲する 2SG 甥 まだ NEG Q
 お前はまた甥が欲しくないのか？

次に、動詞助詞 *báθà* と動詞 *báθà* の違いについて検討する。音韻的には、動詞助詞 *báθà* は *wáθà* あるいは *káθà* とも発音される点において動詞の *báθà* とは異なる。動詞 *báθà* は常に *báθà* と発音される。

統語的には、動詞の *báθà* は(45)の例のように目的語を取ることができるが、動詞助詞の *báθà* は独自の目的語を取ることができない。(44)の *nə* (2SG)は意味的に見て *báθà* の目的語とは考えられない。したがって、*báθà* は元の動詞の特徴を失っている。また、*jə báθà* (1SG/欲する)「私は欲しい」は、私は何らかの動作を行いたいという意味にはならない。したがって、動詞助詞の *báθà* は単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴を失っている。

一方、(44)の *báθà* がもし動詞だと仮定すると、ここでは連結型動詞連続の第二動詞として現れていることになる。そして、意志動詞 *dó*「殴る」の後に無意志動詞 *báθà*「欲する」が現れていることになる。しかし、2.3.15 で述べたように、連結型動詞連続においては、一般に、第一動詞と第二動詞がどちらも意志動詞であるか無意志動詞であるかのいずれかになる（主語を共有しない「他動詞+自動詞」の組み合わせを除く）。したがって、第一動詞が *dó* のように意志動詞であれば、第二動詞として現れ得るのも意志動詞である。*báθà* は無意志動詞だから、本来はこの位置に現れることができない。つまり、(44)の動詞助詞 *báθà* は、元の動詞が現れない位置に現れているという点で、元はなかった新たな特徴を獲得していると見ることができる。

2.3.20. *tháu* 「最も～だ」

動詞助詞 *tháu*「最も～だ」は動詞の後に置かれる。動詞が表す動作や状態において最も程度が甚だしいことを表す。(46)に例を示す。

- (46) *jə ʔé tháu nə ló, phū*
 1SG 愛する 最も 2SG AST 妹
 僕は君を最も愛しているんだよ。

この動詞助詞は自動詞 *tháu*「終わる、尽きる、なくなる」に由来する。(47)にこの動詞が用いられた例を挙げる。

- (47) *chəchən tháu jəv*
 雨 終わる PFV
 雨がやんだ。

次に、動詞助詞 *tháu* と動詞 *tháu* の違いについて検討する。音韻的には二つは同形である。

統語的には、2.3.17で論じたのと同様、出現できる環境の違いがある。(46)の *ʔé* 「愛する」は他動詞だから、もしこの直後の *tháu* が「尽きる」を表す自動詞だとしたら、*nə* 「君」が *tháu* の（論理上の）主語でなければならない。「他動詞+自動詞」という連続においては、他動詞の目的語と自動詞の主語が同一になるからである（2.3.17を参照）。しかし、*nə* (2SG)を *tháu* 「尽きる」の主語項と解釈するには無理がある。だとすれば *tháu* は本来この位置に現れないはずであるが、実際には現れている。すなわち、この *tháu* は、元の動詞が現れないはずの環境に現れることができているのであり、その点で新しい特徴を獲得していると言える。

一方で、*ʔəjò tháu* (これ/終わる)「これは終わった」は「これは最も～だ」のような意味で用いることはできない。つまり、*ʔəjò dó tháu* (これ/大きい/最も)「これが最も大きい」のような意味で用いることはできない。したがって、動詞助詞 *tháu* は、単独で述部を構成することができるという元の動詞の特徴を失っている。

2.3.21. *bá* (1) 「～することになる」

動詞助詞 *bá* (1) 「～することになる」は動詞の後に置かれ、事象が不可抗力的に実現することを表す。2.3.22でもう一つ同形の動詞助詞を扱うので、「(1)」をつけて引用する。しばしばこの動詞助詞は *wá* あるいは *vá* と発音される。(48)に例を挙げる。

- (48) *jə mə ʔán bá jə chá blèbló ló*
 1SG IRR 食べる BA 1SG 餌 腹一杯 AST
 俺 (=オオカミ) は餌を腹一杯食うことになるぞ。

この動詞助詞は、不可抗力を表す用法以外にも、*jáin bá díθú* (踏む/BA/蛙の一種) 「カエルを誤って踏んでしまった」のように過誤を表したり、*dá bá nān phôn ʔé* (見える/BA/NAN/回/NEG) 「一度も見たことがない」のように経験を表すことがある。これらは不可抗力を表す用法と同一の用法に含めることができる可能性がある。また、*chíthəuŋ bá nān thí* (立つ/BA/NAN/回) 「ちょっと立って」のように催促を表すことがある。用法の分類については今後の検討を要する。

この動詞助詞は動詞 *bá* 「当たる、ぶつかる」に由来する。(49)にこの動詞が用いられた例を挙げる（2.3.1の(9)も参照されたい）。

- (49) *mijò bá kā θi*
 猫 当たる 自動車 死ぬ
 猫が自動車にぶつかって死んでしまった。

次に、動詞助詞 *bá* (1) と動詞 *bá* の違いについて検討する。音韻的には、動詞助詞 *bá* (1) はしばしば *wá* あるいは *vá* と発音される。これは動詞の *bá* には見られない特徴である。

統語的には、(49) の例に見るように、動詞 *bá* は目的語を取ることができる。しかし、動詞助詞 *bá* (1) は独自の目的語を取ることができない。例えば(48)の *jə chá* 「俺の餌」を *bá* が取る目的語だと解釈することには無理がある。また、この位置に *ʔán* 「食べる」の目的語以外の名詞が現れることはできない。したがって、動詞助詞 *bá* (1) は目的語を取ることができるという元の動詞の特徴を失っている。また、例えば *jə bá* (1SG/当たる) 「私は (何かに) ぶつかった」という文は、「不可抗力的に何かをすることになった」という意味を表すことはない。したがって、動詞助詞 *bá* (1) は単独で述部を構成することができるという元の動詞の特徴を失っている。

一方で、(48) の *bá* がもし動詞だと仮定すると、ここでは連結型動詞連続の第二動詞として現れていることになる。しかし、第一動詞 *ʔán* 「食べる」は意志動詞であり、第二動詞 *bá* 「当たる」は無意志動詞である。2.3.15 と 2.3.19 で述べたように、主語を共有する連結型動詞連続では、一般的に第一動詞と第二動詞がどちらも意志動詞であるか無意志動詞であるかのどちらかになる。つまり、意志動詞の後に動詞 *bá* は現れない。動詞助詞 *bá* (1) は、元の動詞が現れない位置に現れるという点で、新しい特徴を獲得していると言える。

2.3.22. *bá* (2) 「(誰それ) にとって～だ」

動詞助詞 *bá* (2) 「(誰それ) にとって～だ」は動詞の後に置かれる。主として状態を表す動詞と共起し、その動詞が表す事象が誰かの主観的な判断において成り立つことを表す。判断の経験者は、*bá* (2) の後に置かれた名詞句によって表される。すなわち、この *bá* (2) が使われた節においては、判断の経験者を表す名詞句が増えることになる。Kato (2024) はこの *bá* (2) を、ポー・カレン語に少なくとも 12 個はある適用標識 (applicative marker) の一つとして挙げている。この *bá*、そして 2.3.23 で論じる *nī* 「(誰それ) に影響があるくらいに～だ」、2.3.24 で論じる *phīlân* 「～してやる」、2.3.25 で論じる *pjáo* 「(誰それ) と同じように～する」は適用標識である。2.3.21 で見た *bá* (1) と同様、*bá* (2) もしばしば *wá* あるいは *vá* と発音される。(50) に *bá* (2) の例を示す。

- (50) *cháin lə béin jò xí bá jà*
 シャツ — Ncf この 美しい にとって 1SG
 このシャツは私にとっては美しい。

この動詞助詞は動詞 *bá* 「当たる、ぶつかる」に由来する。これが用いられた例としては、2.3.21 の(49)を見られたい。

次に、動詞助詞の *bá* (2) と動詞 *bá* の違いを検討する。音韻的には、*bá* (2) は *wá* または *vá* と発音されることがあり、これは動詞 *bá* には見られない特徴である。

統語的には、この動詞助詞は(50)のように状態動詞の後に現れるという点で動詞 *bá* とは異なる。動詞 *bá* は「当たる、ぶつかる」と訳することができる瞬間的な事象を表す動態動詞であるため、状態動詞の後に現れて連結型動詞連続を形成することが通常はない。状態の結果として何らかの動態的事象が生じるという現象が少なくともポー・カレン語では連結型動詞連続では表されないためである。しかし、(50)の例のようにこの動詞助詞 *bá* (2) は状態動詞の後に現れることができる。すなわち、この動詞助詞は、状態動詞と共起するという新たな特徴を獲得したのである。

一方で、*ʔəjò bá* (これ/当たる)「これが(誰かに)当たった」という文が、動詞助詞としての「誰かにとって～だ」という意味を持つことはない。したがって、動詞助詞 *bá* (2) は、単独で述部を構成することができるという元の動詞が持つ特徴を失ったのである。

2.3.23. *nī* 「(誰それ) に影響があるくらいに～だ」

動詞助詞 *nī* 「(誰それ) に影響があるくらいに～だ」は動詞の後に置かれる。主として状態を表す動詞と共起し、その動詞が表す事象の程度が誰かに影響を与えるほど甚だしいことを表す。そして、その影響の経験者を表す名詞句が *nī* の後に現れる。この *nī* も適用標識である。例を(51)に示す。

- (51) *châin læ béin jò xī nī ʔə*
 シャツ 一 NCf この 美しい にとって 3SG
 このシャツは彼女を美しくするくらいに美しい。

この動詞助詞は動詞 *nī* 「得る」に由来する。(52)にこの動詞が用いられた例を挙げる。

- (52) *jə nī jákó lī béin*
 1SG 得る ナマズ 四 NCf
 私はナマズを四匹捕まえた。

次に、動詞助詞の *nī* と動詞 *nī* の違いを検討する。音韻的にこの2つは同形である。

統語的に動詞助詞 *nī* が動詞 *nī* と異なる点は、動詞助詞 *nī* が状態動詞の後に現れるということである。2.3.22 で述べたとおり、ポー・カレン語では、状態動詞の後に動態動詞が現れる連結型動詞連続が通常は形成されない。*nī* は動態動詞であり、*dá nī* (見つける/得る)「見つけて獲得する」に見るように、動態動詞とは連結

型動詞連続を形成することができる(dáは動態動詞)。しかし、動詞助詞の nī は状態動詞の後に現れることができる。すなわち、動詞助詞の nī は、状態動詞と共に起するという新たな特徴を獲得したのである。また、動詞 nī は通常、(52)に見るように有生物主語を取る。ところが動詞助詞 nī は(51)のように、無生物主語を取った文にも現れるし、ʔəwê yì nī jə (3SG/良い/にとって/1SG)「彼は私に良い影響を与えるほど良い(人だ)」のように有生物主語を取った文にも現れることができる。すなわち、無生物主語の文にも現れることができるという特徴を動詞助詞の nī は獲得したのである。

一方で、動詞の nī は、ʔəwê nī (3SG/得る)「彼が得た」のように単独で述部を構成することができるが、この文が「彼は誰かにとって良い」という意味を持つことはない。したがって、動詞助詞の nī は単独で述部を構成することができるという元の動詞の特徴を失っていると言える。

2.3.24. phílân 「～してやる」

動詞助詞 phílân 「～してやる」は動詞の後に置かれる。phílân 以外にも phí, wí, phlân という発音がある。この動詞助詞は、受益者を表す名詞を導入する適用標識と見なすことができる。(53)を見られたい。phílân には「(受益)」という逐語訳を付す。

- (53) *jə pɔ́ phílân ʔə lái*
 1SG 読む (受益) 3SG 本
 私は彼に本を読んでやった。

ここでは、受益者を表す ʔə 「彼」が適用標識 phílân の働きによって導入されている。

この動詞助詞は動詞 phílân 「与える」に由来する。(54)に動詞 phílân が用いられた例を挙げる。

- (54) *jə phílân ʔə lái*
 1SG 与える 3SG 本
 私は彼に本をやった。

次に、動詞動詞 phílân と動詞助詞の phílân の違いを検討しよう。動詞助詞 phílân は phí, wí, phlân と発音されることもある。動詞の phílân は、phlân と発音されることはあるが、phí や wí と発音されることはない。したがって、この二つは音韻的に異なる。

統語的には、動詞助詞の phílân が対象(theme)を表す項を取ることができないという点において動詞の phílân とは異なる。動詞の phílân は(54)から明らかかなよう

に、授受行為を表す動詞の対象項を二番目の目的語として取る（この例では *lái* 「本」）。ところが動詞助詞の *phílân* は対象項を取ることができない。例えば *jə tháunlī phílân ?ə* (1SG/踊る/(受益)/3SG) 「私は彼のために踊ってやった」の述語において、対象項が現れることは不可能である。例えば、**jə tháunlī phílân ?ə lái* (1SG/踊る/(受益)/3SG/本) は非文法的である。すなわち、動詞助詞 *phílân* は、対象項を目的語として取るという元の動詞が持っていた特徴を失ったのである。また、*jə phílân* (1SG/与える) 「私は与えた」という文が誰かのために何かを行ったという意味を持つことはない。したがって、動詞助詞の *phílân* は、単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴も失っている。

一方で、*jə xwè phílân ?ə lái?əu* (1SG/買う/与える/3SG/本) 「私は彼に本を買って与えた」のような、動詞 *phílân* が二番目の動詞として現れた連結型動詞連続において、最初の動詞は「与える」という目的を実現するために行う動作を表す動詞である必要があるが、動詞助詞の *phílân* の場合、先ほどの *jə tháunlī phílân ?ə* (1SG/踊る/(受益)/3SG) 「私は彼のために踊ってやった」の例の *tháunlī* 「踊る」のように、与えるという目的の実現とはおよそ関係のない動作を表す動詞とも共起することができる。すなわち、動詞助詞 *phílân* は元の動詞が使われていた環境とは異なる環境でも使うことができるという点で、新しい特徴を獲得したと見ることができる。

2.3.25. *pjáu* 「(誰それ) と同じように～する」

動詞助詞 *pjáu* 「(誰それ) と同じように～する」は動詞の後に置かれる。*pjá* とも発音される。これは模範あるいは模倣の対象となる人物を表す項を増やす適用標識である。(55)に例を挙げる。*pjáu* には「(模範)」という逐語訳を付す。

- (55) *jə jàn pjáu ?ə thàkhó*
 1SG 歌う (模範) 3SG 歌
 私は彼の歌の後について歌を歌った。

この動詞助詞は動詞 *pjáu* 「ついていく、ついてくる」に由来する。逐語訳としては「つく」を用いる。(56)にこの動詞が用いられた例を挙げる。

- (56) *pjáu jə khâin x̄*
 つく 1SG 後 よ
 私の後についてきなさいよ。

次に、動詞助詞 *pjáu* と動詞 *pjáu* の違いについて検討する。音韻的には、動詞助詞 *pjáu* は *pjá* とも発音され、これは動詞 *pjáu* には見られない特徴である。

統語的には、例(55)の *pjáu* を動詞と考えるべきではない理由がある。もし(55)の *pjáu* が動詞だとしたら、*jə̀n pjáu* が連結型動詞連続だということになり、その場合、*jə̀n* の目的語である *thàkhó* 「歌」が現れないはずだからである。加藤(1998)と加藤(2004: 214–219)で論じたとおり、連結型動詞連続すなわち動詞が隣接する動詞連続では、最初の動詞が独自の目的語を取ることはない。しかし、(55)では *jə̀n* 「歌う」の目的語 *thàkhó* 「歌」が現れている。これは、この文の *pjáu* が元の動詞としての特徴を失ったために、*jə̀n* が目的語を取ることを妨げないことが原因と見ることができるといえる。

一方、動詞 *pjáu* は移動に伴う様態を表す動詞であるため、連結型動詞連続の中で現れる場合には、*lì pjáu* (行く/つく)「ついていく」や *ɣê pjáu* (来る/つく)「ついてくる」のように、通常、移動そのものを表す動詞と共起する。しかし、動詞助詞の *pjáu* は、(55)の *jə̀n* のように移動とは無関係の動詞と共起することができる。他にも、*ʔə̀ pjáu ʔə̀* (住む/(模範)/3SG)「彼と同居する」、*mà pjáu ʔə̀ kəlòun* (する/(模範)/3SG/仕事)「彼と同じように仕事をする」、*thəmù pjáu ʔə̀* (演技する/(模範)/3SG)「彼の演技を真似る」、*thō pjáu ʔə̀ thì* (買う/(模倣)/3SG/くじ)「彼を真似てくじを買う」のように様々な動詞と共起することができる。これはすなわち、動詞助詞 *pjáu* が使われる環境が動詞 *pjáu* よりも広いこと、言い換えると、動詞助詞 *pjáu* が新たな性質を獲得したことを意味する。

2.3.26. *θà* 「自らに～する」

動詞助詞 *θà* 「自らに～する」は動詞の後に置かれる。Kato (2019a)で詳しく論じたとおり、これは中動態標識(middle marker)である。(57)に例を示す。

(57) *ʔə̀wé ʔánlè θà jà̀u*
 3SG 変える MID aaa
 彼は変わってしまった。

動詞助詞 *θà* の用法には、中動態構文(middle construction)を作る用法、再帰構文(reflexive construction)を作る用法、相互構文(reciprocal construction)を作る用法の3つがある。(57)は *θà* が中動態構文のうち逆使役構文を作るために使われた用法である。詳しくは Kato (2019a)を見られたい。

この動詞助詞は名詞 *θà* 「心臓; 心」に由来する。(58)に「心」の意味を表す例を挙げる。

(58) *jə̀ θà dē nə θà nó lə̀ ɣà dē lə̀ ɣà*
 1SG 心 と 2SG 心 TOP 一 NCh と 一 NCh

béθò kàtháun thá phli θò

ような 縛る ておく 紐 ような

僕の心と君の心は互いに縛った紐のよう（に固く結ばれている）。

次に、動詞助詞 $\theta\grave{a}$ と名詞 $\theta\grave{a}$ の違いについて検討する。音韻的にはこの二つは同一である。

統語的には、動詞助詞 $\theta\grave{a}$ は文の主題要素として用いることができない点において、名詞の $\theta\grave{a}$ と異なる。主題要素は一般的に文頭に置かれ、その後に *nó* を始めとする主題標識が現れる。(58)の *jə θà dē nə θà* 「僕の心と君の心」は文頭にあり、主題標識の *nó* が後置されていることから、文の主題要素になっていると言える。しかし、(57)の $\theta\grave{a}$ を文頭に置いて **θà nó ʔəwê ʔánlè jào* (MID/TOP/3SG/変える/PFV) とすることはできない。これは、名詞 $\theta\grave{a}$ が名詞としての特徴を失っているためと見ることができる。

一方で、動詞助詞 $\theta\grave{a}$ は、(57)の *ʔánlè* 「変える」のような他動詞の後に現れる以外に、自動詞の後にも現れるという点で特徴的である。Kato (2019a: 34)に挙げた例からいくつか引用すると、*ʔùtə̀ràì θà* (回転する/MID) 「回転する」、*kə̀tháì θà* (はさまる/MID)、*kàìnp̀hà θà* (分かれる/MID)、*là̀nch̀è θà* (ぶら下がる/MID)、*wà̀təl̀ù θà* (震える/MID)などがある。ここに引いた例においてははすべて、 $\theta\grave{a}$ を削除することができる。例えば *kàìnp̀hà* はこれだけでも「分かれる」を意味する動詞として用いることができる ($\theta\grave{a}$ の有無による意味の差異は極めて微細なようであり、詳細はまだ不明である)。重要なことは、*kàìnp̀hà* が自動詞であるのに、後に $\theta\grave{a}$ が現れていることである。自動詞の後に名詞が現れることは、移動や存在を表す動詞を除けば、通常はない。自動詞の後にも現れるという事実は、動詞助詞 $\theta\grave{a}$ が、他動詞の後にしか現れない通常の名詞とは異なる特徴を獲得したことを意味する。

2.4. 従属節助詞

従属節助詞は従属節を作って文中に導入する働きを持つ助詞である。加藤(2004)は前部で26個の従属節助詞を挙げている。そのうち内容語由来の従属節助詞は4個ある。

2.4.1. *yò̀n* 「～してから」

従属節助詞 *yò̀n* 「～してから、～して」は節の末尾に置かれて副詞節を作り、継起を表す。(59)に例を挙げる。

(59) *nə mō phà thán nī nə yò̀n,*
2SG 母 産む VPup 得る 2SG してから

nə mō θi mèin
2SG 母 死ぬ MEIN

お前の母さんはお前を産んでから死んで行った。

この従属節助詞は動詞 *yòN* 「終わる」に由来する。(60)にこの動詞が用いられた例を挙げる。

(60) *lənéinjò phlòunthîkhānmūni θi yòN jàσ*
今年 カレン州記念日 も 終わる PFV
今年もカレン州記念日 (の祭) が終わった。

次に、従属節助詞 *yòN* と動詞 *yòN* の違いについて検討する。音韻的には、この二つは同一である。

統語的には、従属節助詞の *yòN* には動詞助詞 *mə* (IRR) や *lə* (NEG) を前置することができない。(59)の *yòN* にこれらを前置した **nə mō phà thán nī nè mə yòN ...* と **nə mō phà thán nī nè lə yòN ...* はどちらも非文法的である。これは、(60)の動詞 *yòN* が *lənéinjò phlòunthîkhānmūni θi mə yòN* 「今年もカレン州記念日が終わる」および *lənéinjò phlòunthîkhānmūni θi lə yòN (bá)* 「今年もカレン州記念日が終わらないので...」に見るように *mə* と *lə* の前置を許すのと対称的である。すなわち、従属節助詞の *yòN* は動詞助詞と共起するという元の動詞の特徴を失っている。また、*phlòunthîkhānmūni yòN* (カレン州記念日/終わる) 「カレン州記念日が終わった」という文の *yòN* は、カレン州記念日の次に起こる事象の存在を意味論的に含意しない。つまり、この *yòN* を従属節助詞の *yòN* と見なすことはできない。したがって、従属節助詞 *yòN* は単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴を失っていると見ることができる。

一方で、従属節助詞の *yòN* は、これによって導入された従属節が文の中で副詞節として機能する。副詞節を文中に導入する機能は動詞にはない(従属節を主語や目的語として導入する、言い換えると補文を導入する機能を持つ動詞はある)。したがって、従属節助詞の *yòN* は元の動詞にはなかった新たな機能を獲得している。

2.4.2. *thōN* 「～するまで」

従属節助詞 *thōN* 「～するまで」は節の冒頭に置かれ、時間的限界を表す副詞節を作る。(61)に例を挙げる。

- (61) *mə ʔé nân, thōN jə θi*
 IRR 愛する 姉 まで 1SG 死ぬ
 (僕は) 君を死ぬまで愛する。

この動詞助詞は動詞 *thōN* 「着く」に由来する。動詞 *thōN* の例としては、2.1.1 「*thōN* 「～に」(場所)」の(2)を見られたい。

次に、従属節助詞 *thōN* と動詞 *thōN* の違いについて検討する。音韻的には、従属節助詞の *thōN* は声調が元の低平調から中平調になっている。この変化は 2.1.1 で扱った前置助詞 *thōN* 「～に」に見られるのと同じ変化である。

統語的には、2.1.1 で論じたように元の動詞 *thōN* が動詞助詞 *mə* (IRR) と *lə* (NEG) の前置を許すのに対して、(61)の *thōN* はこれらの前置を許さない。**mə ʔé nân, mə thōN jə θi* と **mə ʔé nân, lə thōN jə θi* に見るとおりである。つまり、元の動詞の特徴を失っている。また、*jə thōN* (1SG/着く) 「私は着いた」という文の *thōN* は、発音を *thōN* とすると非文法的になる(2.1.1 の *thōN* と同様である)。したがって、従属節助詞 *thōN* は単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴を失っていると言える。

一方で、元の動詞に副詞節を導入する機能はないから、従属節助詞 *thōN* は新たな機能を獲得していると言える。

2.4.3. *xwè* 「～する限り」

従属節助詞 *xwè* 「～する限り」は節の冒頭に置かれ、範囲を限定する副詞節を作る。この従属節助詞は *xwē* とともに発音される。(62)に例を挙げる。

- (62) *xwē nə ʔán báθà nó, ʔán ʔə*
 限り 1SG 食べる たい TOP 食べる 3SG
 あなたが食べたいだけ食べなさい。

この動詞助詞は動詞 *xwè* 「満ちた」に由来する。(63)にこの動詞が用いられた例を挙げる。

- (63) *méthi xwè*
 涙 満ちた
 涙が(目にたまって)いっぱいになった。

次に、従属節助詞 *xwè* と動詞 *xwè* の違いについて検討する。音韻的には、従属節助詞の *xwè* は *xwē* とともに発音される。すなわち、低平調で発音する場合と中平調で発音する場合とがある。一方、動詞の *xwè* は常に低平調で発音される。

統語的には、従属節助詞の *xwè* には動詞助詞 *mə* (IRR) や *lə* (NEG) を前置することができない。(62)の *xwē* に *mə* と *lə* を前置した **mə xwē nə ʔán báθà nó* および

う」および *phjājò lə yì təcā (bá)* 「これはあまり良くないので」に見るとおりである。すなわち、従属節助詞の *yì* は元の動詞の特徴を失っている。また、*phjājò yì* (これ/良い) 「これは良い」という文の *yì* のような単独で述部を構成した *yì* は、選択肢が存在することを意味論的に表さない。このことから、従属節助詞 *yì* が単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴を失っていることを見て取ることができる。

一方で、副詞節を導入する機能は動詞にはないので、従属節助詞 *yì* は新たな機能を獲得していると言える。

2.5. 副助詞

副助詞は、動詞句や述語名詞句を修飾してそれらを拡大する働きを持つ助詞である。加藤(2004)は全部で17個の副助詞を挙げている。このうち内容語由来の副助詞は今のところ1個しか見つかっていない。

2.5.1. *ləyì* 「～するな」

副助詞 *ləyì* 「～するな」は述部の最後尾に置かれ、禁止を表す。*ləyì* 以外に *ləxi*, *ləkhi*, *xì*, *khi* と同発音される。最近では *ɛì* という発音も聞かれるようになった。日常会話では *khi* あるいは *xì* と発音されることが多い。(66)に例を示す。

- (66) *lə bá phlòʊn nāN yà ləyì*
 語る BA 人 NAN NCh PROH
 誰にも言うな。

この副助詞は動詞 *yì* 「良い」の否定形である *lə yì* (NEG/良い) 「良くない」に由来する。(67)に *lə yì* の例を挙げる。否定辞 *lə* は従属節内の動詞を否定する際に使われる形式である。ただし、主節の動詞を *lə* で否定することもある(Kato [2022a: 177–188]参照)。その場合、否定を強調するような意味合いが生じる。否定辞 *lə* は動詞の前に置かれ、これが現れると、これに呼応するように節末に *bá* が置かれることが多い。つまり、いわゆる *double negation* の形を取る。ただし、*bá* の出現は必須ではない。

- (67) *lə yì bá nó mwē ja phā*
 NEG 良い NEG TOP COP 1SG 父
 良くないのは僕のお父さんだ。

次に、副助詞の *ləyì* と動詞 *yì* の否定形式である *lə yì* の違いについて検討する。音韻的には、前者には *ləyì*, *ləxi*, *ləkhi*, *xì*, *khi*, *ɛì* といった発音があるが、*lə yì* にはこの発音しかない。

統語的には、(67)に見るように、動詞 *yì* の否定形である *lə yì* の場合には節末に *bá* が現れ得る。しかし、副助詞 *lə yì* の後に *bá* を置くことはできない。**lə bá phlòon nān yà lə yì bá* は非文法的である。すなわち、副助詞 *lə yì* は元の動詞の特徴を失っていると見ることができる。また、*phjājò lə yì (bá)* (これ/NEG/良い/NEG)「これは良くないので」に見るように、動詞は前置した *lə* と共にそれだけで述部を構成することができるのであるが、このような述部を構成する *lə yì* が意味論的に禁止を表すことはない。したがって、副助詞 *lə yì* は述部を構成する機能を失っていると考えることができる。

また、副助詞 *lə yì* と動詞の否定形 *lə yì* の間に見られる違いとして、否定極性項目(negative polarity item)である *nān* で作られる句との位置関係の違いが挙げられる。*nān* は後に助数詞などを従えて否定節で使われ、いわゆる全部否定(complete negation)を表す。*nān* の後に助数詞などが現れた構成句を *nān* 句と呼ぶと、*lə yì* を用いた節では、*nān* 句が(66)のように *lə yì* の前に現れる。一方、通常の用法では、(68)に示すとおり、*nān* 句は動詞の後に現れる。この例の末尾に現れた *ʔé* は副助詞の一種であり、主節を否定するときに使われる最も一般的な否定形式である(ポー・カレン語の否定形式[negator]については Kato [2022a]を参照されたい)。(66)と(68)を比較すると、副助詞 *lə yì* はこの否定形式 *ʔé* と同じ位置に現れていることが分かるだろう。

- (68) *jə lə phlòon nān yà ʔé*
 1SG 語る 人 NAN NCh NEG
 私は誰にも言いません。

一方、(67)の動詞 *yì* の否定に *nān* 句を使うと、*nān* 句は次の(69)のように *lə yì* の後に現れる。

- (69) *lə yì nān cè bá nó mwē jə phā*
 NEG 良い NAN 少し NEG TOP COP 1SG 父
 少しも良くないのは僕のお父さんだ。

副助詞 *lə yì* と *nān* 句の位置関係を見ると、*lə yì* は動詞よりも副助詞 *ʔé* に近い特徴を持っていることが見て取れる。言い換えると、*lə yì* は副助詞としての特徴を獲得したと考えることができる。

2.6. 一般助詞

一般助詞は、名詞句、動詞句、前置助詞句、従属節などを含む様々な統語的要素と共起することのできる助詞である。加藤(2004)は全部で14個の一般助詞を挙げている。内容語由来の一般助詞は今のところ1個しか見つかっていない。

2.6.1. thōN 「～でさえ」

一般助詞 thōN 「～でさえ」は様々な要素の前に置かれてその要素を修飾し、極限的な条件を表す。下に例を挙げる。thōN には逐語訳「さえ」を付す。thòN は、(70)では名詞句 chərâ dàutà 「お医者様」を、(71)では分離型動詞連続の最初の動詞句 khàin 「話す」を、(72)では θí 「も」によって導入された副詞節 khà θí 「高くても」を、それぞれ修飾している。(73)の thōN が何を修飾しているのかは難しい問題である。もしかすると、文全体を修飾している可能性がある。

(70) xíphàn chəchâ nó thōN chərâ dàutà θí
 (人名) 病気 TOP さえ 先生 医者 も

bjàn wé nī làn ʔé
 治す VPemp 得る もはや NEG

ファイブアウンの病気はもはやお医者様でさえ治すことができなかった。

(71) thōN khàin θí ʔé mí
 さえ 話す できる NEG よ
 話すことさえできないよ。

(72) thōN khà θí ʔaphlòun yê xwè thíchà ló
 さえ 高い も 人 来る 買う 確かな AST
 (値段が) 高くても、人は必ず買いに来るんだよ。

(73) thōN jə dá cò làn ʔé
 さえ 1SG 見える (遠隔) もはや NEG
 もはや (未来) が見えさえもしない。

この一般助詞は動詞 thòN 「着く」に由来する。動詞 thòN の例としては、2.1.1 「thōN 「～に」(場所)」に挙げた(2)を見られたい。

次に、一般助詞 thōN と動詞 thòN の違いについて検討する。音韻的には声調が異なり、動詞 thòN が低平調であるのに対し、一般助詞 thōN は中平調である。これは2.1.1 で見た前置助詞 thōN 「～に」および2.4.2 で見た従属節助詞 thōN 「～するまで」と共通する特徴である。

統語的には、一般助詞 thōN には動詞助詞 mə (IRR)や lə (NEG)を前置することができない。(70)の thōN chərâ dàutà θí 「お医者様でさえ」を例にとると、*mə thōN chərâ dàutà θí および *lə thōN chərâ dàutà θí はどちらも非文法的である。かたや2.1.1 で見たように、動詞の thòN には mə も lə も前置することが可能である。したがって、一般助詞 thōN は元の動詞の特徴を失っていると言える。また、2.1.1 と2.4.2 で論

じたのと同様に、jə thòN (1SG/着く)「私は着いた」という文の thòN は、発音を一般助詞の thōN と同じく中平調で発音すると非文法的になる。したがって、一般助詞 thōN は単独で述部を構成できるという元の動詞の特徴を失っていると言える。

一方で、一般助詞 thōN は(70)から(73)の例に見るように、様々な要素と共に現れてその要素を修飾する。これは動詞には見られない特徴である。動詞が修飾できるのは、phlòun yì (人/良い)「良い人」のような例から分かるように、名詞のみである。助詞 thōN は様々な要素を修飾することができるという一般助詞の特徴を獲得していると言える。

3. まとめ

本稿の目的の一つは、内容語が文法化して生じたと考えられる機能語のリストを作ることだった。表3がそのリストである。これまでに、名詞あるいは動詞に由来する助詞が全部で36個見つかっている。左欄に、論じてきた順番に従って機能語(=助詞)を配列した。各助詞には論じた節番号を振ってある。右欄はそれぞれの助詞の起源と考えられる内容語(=名詞または動詞)である。内容語由来の機能語は他にも存在する可能性が十分にある。その可能性を視野に入れて今後もポー・カレン語の文法を観察する必要がある。

表3 内容語由来の機能語とその起源となった内容語

機能語	元の内容語
前置助詞	
2.1.1. thōN 「～に」(場所)	thòN 「着く」
2.1.2. báchâin 「～について」	báchâin 「(～と) 関係がある」
名詞修飾助詞	
2.2.1. láo 「～とも」	láo 「尽きる」
2.2.2. láodē 「～のすべて」	láo 「尽きる」 + dē 「～と」
動詞助詞	
2.3.1. bá 「～しなければならない」	bá 「当たる」
2.3.2. yê 「徐々に～になる」	yê 「来る」
2.3.3. mà 「～させる」	mà 「する」
2.3.4. phílân 「～させてやる」	phílân 「与える」
2.3.5. lò 「語って～させる」	lò 「語る」
2.3.6. kò 「呼んで～させる」	kò 「呼ぶ」
2.3.7. thán 「上方向に～する」	thán 「上がる」

2.3.8. làn 「下方向に～する」	làn 「下がる」
2.3.9. thàiN 「～しかえす」	thàiN 「帰る」
2.3.10. kədà 「逆向きに～する」	kədà 「裏側」
2.3.11. θāN 「～したばかり」	θāN 「新しい」
2.3.12. jō 「～してみる」	jō 「見る」
2.3.13. jōwá 「～してみる」	jōkhwā 「観察する」
2.3.14. yú 「こっそり～する」	ʔányú 「盗む」
2.3.15. khwái 「～してしまう」	khwái 「投げる」
2.3.16. èau 「予期せず～してしまう」	èau 「驚く」
2.3.17. kòuN 「皆で集まって～する」	kòuN 「集まる」
2.3.18. chón 「無理やり～する」	chón 「強い」
2.3.19. báθà 「～したい」	báθà 「欲する」
2.3.20. tháu 「最も～だ」	tháu 「終わる」
2.3.21. bá (1) 「～することになる」	bá 「当たる」
2.3.22. bá (2) 「(誰それ)にとって～だ」	bá 「当たる」
2.3.23. nī 「(誰それ) にとって影響があるくらいに～だ」	nī 「得る」
2.3.24. phílân 「～してやる」	phílân 「与える」
2.3.25. pjáu 「(誰それ) と同じように～する」	pjáu 「ついていく」
2.3.26. θà 「自らに～する」	θà 「心臓」
従属節助詞	
2.4.1. yòN 「～してから」	yòN 「終わる」
2.4.2. thōN 「～するまで」	thōN 「着く」
2.4.3. xwè 「～する限り」	xwè 「満ちた」
2.4.4. yì 「～であっても」	yì 「良い」
副助詞	
2.5.1. ləyì 「～するな」	lə yì 「良くない」
一般助詞	
2.6.1. thōN 「～でさえ」	thōN 「着く」

加藤(2004)は全部で 166 個の助詞を挙げている。その内訳は、前置助詞 9 個、名詞修飾助詞 17 個、動詞助詞 61 個、従属節助詞 26 個、副助詞 17 個、一般助詞 14 個、文助詞 22 個である。単純計算をすれば、総数 166 個のうち 36 個、すなわち約 22%が内容語由来であることになる。本稿では、元の内容語が現代でも使われている機能語に考察対象を絞った。それでもその割合は 5 分の 1 を超える。起源となった内容語が既に使われなくなったものも含めると、助詞すなわち機能語のうち内容語に由来するものの割合は、相当に高くなるのではないかと思われる。Hopper and Traugott (2003: 107)は、“Given the hypothesis of unidirectionality, it can be hypothesized that diachronically all minor categories have their origins in major categories.”(一方向性の仮説を考えると、通時的にすべてのマイナー・カテゴリーがメジャー・カテゴリーに起源を持つという仮説を立てることができる。)と述べる。大雑把に言えば、メジャー・カテゴリーは内容語に相当し、マイナー・カテゴリーは機能語に相当する。ポー・カレン語における内容語由来の機能語の割合の高さは、このような仮説の信憑性が低くないことを予感させる。

内容語由来の助詞が動詞由来であるか名詞由来であるかを見ると、名詞に由来する助詞が明らかに少ない。kədə「逆向きに～する」と θà「自らに～する」のみが名詞に由来し、他はすべて動詞由来である。名詞由来の機能語が少ない理由は分からない。なお、場所を表す名詞が文法化して側置詞のような機能を持つことは様々な言語でよくあることだが(Heine and Kuteva 2002)、現代ポー・カレン語の場所を表す名詞について言えば、側置詞的な機能語に文法化したと言える特徴を獲得していないように思われる。例えば、「上」を表す ?əphânkhú を例にとると、lái?ào ?ó lá cəpwē ?əphânkhú (本/ある/LOC/机/上)「本が机の上にある」において、場所を表す前置助詞 lá が現れるのはよくあることだからである。lá を使わないこともあるが、これは場所を表す名詞一般によく見られる現象である。したがって、「上」を表す ?əphânkhú は、まだ機能語と言える段階に至っていないと考える。

もう一つの目的であった、機能語と元の内容語との統語論的違いを明らかにするという点については、個々の機能語を扱った節で可能な限り丁寧に論じたつもりである。ポー・カレン語文法の全体を扱った加藤(2004)では、この点をあまり明確にできなかった。内容語が文法化によって機能語になったときに、何を獲得し何を失ったかが本稿でかなり明らかになったのではないかと信ずる。

最後に、文法化に関連する問題として、2.3.23 でも扱った nī「得る」という動詞について述べておきたい。私は Vittrant and Watkins (2019)に Kato (2019b)を書いたとき、编者から、ポー・カレン語では「得る」という動詞が文法化して可能を表すようになってきているかとの質問を受けた。この問いに答えるのは少々難しい。ポー・カレン語の nī「得る」が可能を表すのは確かであり、それは Enfield (2003)が論じたように多くの東南アジア諸言語で「得る」を表す動詞が可能を表すのと同様である。しかしながら、文法化しているかと問われれば、否と答えるしかない。この問題を論じるため、(74)を見ていただきたい。

- (74) ʔəwê ʔán mī ló yéin nī
 3SG 食べる ご飯 LOC 家 得る
 彼は家でご飯が食べられる。

この例文の *nī* は、分離型動詞連続の第二動詞として現れ、明らかに可能を表している。この文が表す状況は、例えば、いつもは昼ご飯を職場で食べることしか許されていない人が今日は許可が出て家で食べられる、というような状況である。したがって、ポー・カレン語の *nī* が可能を表すのは明らかである。しかし、この *nī* が文法化しているかという点、そうとは言えないという問題がある。本稿で用いた動詞助詞 *mə* (IRR) および *lə* (NEG) を使ったテストを施してみると、ʔəwê ʔán mī ló yéin mə nī 「彼は家でご飯が食べられるだろう」も、ʔəwê ʔán mī ló yéin lə nī (bá) 「彼は家でご飯が食べられないので」も、文法的に適格である。さらに、*nī* は単独で述部に現れた場合にも「可能な」という意味を表せる。(75)はこれだけで適格な文として成立する。

- (75) (ʔánó) nī
 それ 得る
 (それは) 可能です。

すなわち、*nī* は動詞性を失っていない。したがって、動詞 *nī* は可能を表すことができるけれども、これは文法化の枠の中で扱われるべき問題ではなく、*nī* 「得る」という動詞が「可能な」という意味を派生させたという意味変化の枠の中で扱われるべき問題である。ある言語で「得る」という意味の動詞が可能を表すようになっていたとしても、それは文法化と必ずしも連動していないことをここで強調しておきたい。

略号

AST = 断定(assertion); BA = 不可抗力などを表す動詞助詞 *bá*; CAUS = 使役(causative); CHI = 英語の *too* 「～も」に相当する機能を持ち、ときに口調を和らげる働きをする *chī*; COP = コピュラ動詞(copular verb); DE = 随伴者・道具・列挙を表す前置助詞 *dē*; IPS = 非人称主語(impersonal subject); IRR = 非現実法(irrealis); LOC = 場所(location)・源泉(source)・着点(goal)を表す前置助詞 *ló* (*lé*, *lú*)あるいは場所を表す前置助詞 *thōn*; MEIN = 自然な成り行きを表す動詞助詞 *mèin*; MID = 中動態標識(middle marker); NAN = 助数詞の前に現れて少数を表す形式 *nān*; Ncf = 平らな物(flat thing)を表す助数詞(numeral classifier); NCh = 人間

(human)を表す助数詞(numeral classifier); NCr = まるい物(round thing)を表す助数詞(numeral classifier); NCt = 種類(type)を表す助数詞(numeral classifier); NEG = 否定(negation); PFV = 完結相(perfective); PL = 複数(plural); PROH = 禁止(prohibitive); Q = 疑問(question)を表す助詞; SG = 単数(singular); THAIN = 「～しかえす」等の意味を表す動詞助詞; TOP = 主題(topic); VP = 動詞助詞(verb particle); VPdn = 下方向(downwardness)を表す動詞助詞; VPemp = 強調(emphasis)を表す動詞助詞; VPlim = 制限(limitation)を表す動詞助詞dá; VPthr = 徹底(thoroughness)を表す動詞助詞 khwái; VPup = 上方向(upwardness)を表す動詞助詞; 1 = 一人称; 2 = 二人称; 3 = 三人称

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. & R. M. W. Dixon. 2006. *Serial Verb Constructions: A Cross-linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press.
- Enfield, N. J. 2003. *Linguistic Epidemiology: Semantics and Grammar of Language Contact in Mainland Southeast Asia*. London/New York: RoutledgeCurzon.
- Heine, Bernd & Tania Kuteva. 2002. *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopper, Paul J. & Elizabeth Closs Traugott. 2003. *Grammaticalization (Second edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 加藤昌彦. 1998. 「ポー・カレン語（東部方言）の動詞連続における主動詞について」. 『言語研究』 113. pp.31–61.
- . 2004. 「ポー・カレン語文法」. 東京大学博士論文.
- . 2019. 「ポー・カレン語の使役と逆使役」. 池田巧（編）『シナ＝チベット系諸言語の文法現象2 使役の諸相』. 京都：京都大学人文科学研究所. pp.181–203.
- Kato, Atsuhiko. 2019a. “The middle marker in Pwo Karen”. *Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies* 50. pp.21–62.
- . 2019b. “Pwo Karen”. In Vittrant, Alice & Justin Watkins (eds.) *The Mainland Southeast Asia Linguistic Area*. Berlin: Mouton de Gruyter. pp.131–175.
- . 2021a. “Pwo Karen writing systems”. *Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies* 52. pp.23–55.
- . 2021b. “Typological profile of Karenic languages”. In Sidwell, Paul & Mathias Jenny (eds.) *The Languages and Linguistics of Mainland Southeast Asia*. Berlin/Boston: Mouton de Gruyter. pp.337–367.
- . 2022a. “Negation and polarity-reversing effect of an interrogative marker in Pwo Karen”. In Hayashi, Norihiko and Takumi Ikeda (eds.) *Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 5: Diversity of Negation*. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University. pp.183–202.
- . 2022b. “Eastern Pwo Karen verb particles indicating ‘up’ and ‘down’”. In Hayashi, Norihiko (ed.) *Topics in Middle Mekong Linguistics 3 (Journal of Research Institute 63)*. Kobe: Kobe City University of Foreign Studies. pp.143–176.
- . 2024. “Applicative markers in Pwo Karen”. A paper read at TaLK (Theoretical Linguistics at Keio) 2024: Myanmar Linguistics, State of the Art (2).
- Vittrant, Alice & Justin Watkins. 2019. *The Mainland Southeast Asia Linguistic Area*. Berlin: Mouton de Gruyter.